
S y m p a t h y ~ 素直になって ~

笠原綾乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sympathy素直になつて

【Nコード】

N5768J

【作者名】

笠原綾乃

【あらすじ】

気の強さとはつきり物事を口にする性格が災いし、ふられてばかりいる成瀬あずみ。元彼から復縁を迫られて困ったあずみは、ふとしたきっかけで知り合った沢村亮と再会し、『便宜上の恋人』にそんな彼に振り回されて、気がついたら『本当の恋人』になったけれど……。サブタイトルの後ろに【マーク】がついている回は「R15程度の性描写あり」です。苦手な方はご覧いただく際お気をつけ下さい

1 ふられたその日に

「別れてくれないか」

目の前にいるインテリ風な痩せ型の男 杉村幸司が、眼鏡を直しながら目を伏せる。

また、か。

私、成瀬あずみは心の中でため息をついた。

幸司さんと私はつきあって半年あまり。

合コンで知り合って、聴く音楽が同じことから意気投合して、確か向こうから告白されたはず。

幸司さんは優しいから、私の好きなようにさせてくれたし、たいした喧嘩もせずに仲良くしてた。

でも、1ヶ月くらい前に、仕事で致命的なミスをしたと泣きついてきた幸司さんと初めて口喧嘩になった。

かなりキツイことを言った自覚はあったので、一応その場できちんと謝って仲直りをしたはず……だった。

だけどその後、相談したいことがあってメールをしても電話をしても、返事が来なかったから、ああ、やっぱりって感じ。

「あずみは強いから……独りでも大丈夫だろ」

はいはい。大丈夫ですよ。

心の中でつぶやいて、私は頼んだアイスコーヒーを飲み干した。黒の財布を白のカバンから取り出す。

「わかった。別れよう」

淡々と言い放つものだから、幸司さんの細い目が、驚いたように

見開かれた。

「あずみ。その……」

「あなたの気持ちがもうないなら、これ以上一緒にいたって同じでしょ。さよなら」

自分のコーヒー代をテーブルに置いて立ち上がる私を、茫然と見つめる彼を残して店を出た。

地下鉄への連絡通路の天井から、涼を求めてぶら下がる風鈴の音が、私の耳をかすめてく。

夏の終わりとはいえ、まだまだ蒸し暑い。2学期が始まったらしい女子高生が、何人かで列をなして、ネクタイをゆるめてけだるそうに歩いている。

手をつなぎ、仲良さそうにその集団の隣をすり抜けるカップルを横目で見ながら、私はまたため息をつく。

ふられたの……これで何回目だろう？

今回同様、物事をはつきり言う性格が災いしてか、男性とつきあってもふられてばかり。

男ってどうしてこう『守ってあげる』タイプの女の子が好きなんだろう？

っていうか、私、『守ってあげる』なんて甘いセリフ、言われたこと、ない。

つきあう理由もだいたい、『一緒にいて楽しい』とか『元気になれる』とか。

はたまた、『頼りがいがあるから』なんてのもあるんだから、何とも……。

もうすぐ25歳。俗に言う『適齢期』。今は大手通販会社のコールセンターで働いてるけど、同僚や後輩は次々と結婚していく。『寿退社』も少なくない。

私だって、幸せなお嫁さんを夢見てないわけじゃない。でも、こ

うもふられてばかりだと、今後『この人になら、人生すべて預けてもいい』なんて思える人が現れるかどうか……はなはだ疑問。

地下鉄のホームに向かう人波にのまれて歩いていると、カバンのポケットにつつこんだままの携帯電話が震えだす。

「もしもし」

『あずみ？ 今、どこ？』

いけない。忘れてた。

今日はもともと、親友の西村由利と会う約束してたんだっけ。

「ごめん。幸司さんに急に呼び出されちゃって。今から行くわ」

『こつち来る、って……大丈夫なの？』

「うん。後で説明する。じゃあね」

電話を切ると、私は逆方向へ向かって走り出す。

すると、おとなしそうな女子高生らしき女の子が、いかにもチャライ男に話しかけられて困っているのが見えた。

当然、周りは知らんぷり。しかも隣にいる彼氏らしき少年も……見て見ぬふりだ。

「ちよつとおたく。こんなところで何やってんの？」

由利にはすまないと思うけど、こういうの、見て見ぬふりが出来ない私。

「は？ ねえちゃんには関係ないだろ？」

「関係ないけどね、困ってるひと見るとほっとけないのよ。手、離しなさい」

大きな柄物のＴシャツに黒の短パン。髪の毛を金髪にして口ひげをたくわえてはいるけれど、童顔。私より年下なのは明らかだ。

「うるせえな。ひつこんでろ。それとも、あんたが代わりしてくれるっての？」

「冗談でしょ。あんたみたいな空っぱなガキ。相手するだけ時間の無駄だわ」

凶星だったのか、男の顔が真っ赤になる。

「……んだと！ 女のくせに減らず口叩きやがって！」

「ガキに言われたくないわね。顔洗って出直して来なさいよ！」

私が叫んだと同時に、周りから悲鳴が漏れた。目の前にいる男が、ポケットから小さなナイフを取り出したのだ。

……こりゃ、やばいかな。

背筋が冷えたのがわかる。だけど、ナイフなら何とかなるか。
抱えていたカバンを持つ手に力を入れた、そのとき。

「そこまでだ」

少し高い、それでいて太い声が私の背後から聞こえた。

「女性相手にナイフを振りかざすのはカッコ悪いだろ」

私より20センチは高いと思われる男性が、右斜め前に立つ。

「うるせえ！ どいつもこいつも、すっこんでろ！」

男がナイフをかざして、前へ出た。私を軽く後ろへ押した彼は男のナイフを叩き落とし、腕をねじあげる。

思わず見惚れてしまうほど、無駄のないきれいな動き。

騒ぎをどこで聞きつけたのか、警備員らしき二人組がやって来て、男を連行して行く。

「どうもありがとうございました」

泣きそうな声で頭を下げて来る女子高生。しかし、その彼氏らしき少年はバツの悪そうな顔をしてうつむくだけ。カチンと来た私はそいつの前に立った。

「ちょっと、あんた男でしょ！？ 彼女守れないでどうするのよ」

女の私に言われたのがよほど悔しかったのか、眼鏡をかけた少年は顔をゆがめて、彼女の手を引いて足早に去って行く。

「あいつとのつきあい、考えた方がいいかもな。彼女」

「私もそう思います。何なの？ あれ」

お互い、前を向いたままなのに会話が成立していることにびっく

りした私は思わず横を見た。

大きな目。少しくせのある形をした高い鼻。その横にある小さなほくろ。

吹き出した彼の子供のような笑顔に、私の頬も少しだけゆるむ。

「それにしても、君、勇敢だね。普通ああいうのはみんなスルーするのに」

「困ってるひとを見るとほっとけないんですよ。まさか、あいつがナイフ取り出すなんて思いもしなかったけど」

「でも、女の子なんだから。あまり無茶しちゃダメだよ」

「はい。今度は気をつけます」

男性に向かって頭を下げた直後、私の携帯が鳴った。

「あ！」

「いけない」

どうやら彼の携帯も鳴っていたようで、画面を見て同時に叫んだ。

「悪い。ちよつと約束があつて」

「私も……あの、ありがとうございます！」

丁寧に頭を下げる時間もないまま、背中を向けて歩き出す。

『ちよつと！ あんたから連絡しておいて、いつまで待たせるのよ！？』

電話を取つてすぐ、ややイラついた由利の声が飛び込んでくる。

「ごめんって。すぐそっち行くから」

通話を無理やり終わらせて、私は思わず後ろを振り返る。

いるわけない、か。

久しぶりに、守ってもらったような気がする。

がっしりした体格。男をやり込めたときの流れるような動き。

それに似合わない、子供のような笑顔を思い出した私はクスッと笑って、待ち合わせ場所へ走って行った。

2 思わぬ再会

「またふられたの!？」

ショートカットの似合う由利が、某有名コーヒーチェーンのロゴが入っている紙コップから口を離して、少し大きな声を上げた。

「そんな素っ頓狂な声上げないでよ。ただでさえあなたの声高いのに」

大きな目をキョロキョロさせた由利が、コップを持つのと逆の手を口元に持つていく。薬指には、去年のクリスマススイブにもらったという、ブランド物のシルバーリングが光っていた。

「つきあい始めてどのくらいだったっけ? あんたたち」

「半年とちよつと」

声をひそめた由利に、私は短く答える。

「また、彼のプライドを傷つけるようなことでも言っただけでしょ」

由利がズバツと切り込んでくる。

「まあ、仕事ミスした。俺はもうクビだ、なんて情けないこと言うから、多少キツイことは言っただけ。正直、あれくらいでへこまないで欲しいわ」

「それが駄目なのよ。だいたいあずみはね、物事をはっきり言い過ぎるの」

「由利に言われたくないわよ。野田さん、あんたとの結婚、よく決意したわよね」

野田さん、とは由利の婚約者の野田隼人さん。由利とは会社の同期。営業成績はトップクラスだったんだけど、社長命令に背いて千葉の子会社に出向中。

顔立ちは整ってるのにユーモアセンスは抜群で、他人との垣根を感じさせない。ゆえに、かなりもてる。由利の婚約者じゃなければ、私も好きになってたかも。ってくらい、素敵な人。

「あら。去年のクリスマスの前に隼人と別れたあと、私に隠れて彼

をあおつてたのは、どこの誰でしたっけね？」

確かに去年、ふたりが別れたあと由利には違う男の子を勧めておいて、隠れて野田さんと会って説教はしたし、よりを戻すようにお願いもした。

でも、そうでもしなきゃあんたが壊れるのは時間の問題だったじゃないよ　と言いたところだけど、ここは素直に認めておこう。
「はいはい、私です。どうもすみませんね」

少し嫌味を混ぜて、頭を下げる。

こんなやりとりを他人が見たら、このまま喧嘩になるんじゃないかとヒヤヒヤするらしい。実際、野田さんと会っていたのがばれたあとは大ゲンカもした。

でも、お互いあやまってしまえばあとに引くことなく、すぐ元に戻るのが私たちの強み。

そんな由利との最初の出会いは去年の初めにあった、いわゆる合コン。

すでに野田さんとききあっていた由利にとって、数合わせでの出席なんて迷惑極まりなかったらしい。で、隅っこで口もきかずに飲んでいた彼女に絡んだ酔っ払いを、私が追い払ったのがきっかけ。

本当は由利の方が4歳も年上なのに、私は遠慮せずに物を言う。でも彼女は年齢差なんて意に介さず対等に見てくれるから、一緒にいるとラク。

「で、昨日、電話で言ってたお願いって？」

由利が本題に入ってきた。

「うん。実はね……男のひとを紹介してくれないかと思って」

「もう？　ちょっと切り替えが早過ぎるんじゃないの？」

昨日の時点ではまだ『彼氏持ち』だった私の言葉に、由利がため息をつく。

「仕方がないじゃない。フリーだってバレると、都合悪いんだもの」「どういう意味よ？」

「ほら、去年の今頃つきあってた、大村忠行さん、覚えてない？」

「ああ。大手ディーラーの営業やってる人よね。隼人もお世話になった」

私の紹介で、野田さんが車を買って替えたときにかなり融通してもらった。

その後、冬を迎える前に今日と『ほぼ』同じ理由で別れたけど。

「その人がね、先週、よりを戻したいって言ってきたの」

「彼女いるのに？」

「彼女さん、かなり思い込みが激しい人みたいで、しょっちゅう浮気疑われて精神的にまいってるんだって。で、放任主義の私がいいんですと」

「あきれた、何よそれ。あんたと二股かけといて……つと、ごめん」
顔の前で手を合わせた由利の声が、心なしか小さくなる。

「別に。もう終わったことだし。あのひとプライド高いから、またつきあっても同じ結果になるだけだと思っただよ。第一、また二股かけられるなんてゴメンだもの」

「そこで、彼氏のふりをしてくれる人を探してくれて？」

「そう。つきあってるひとがいるからって言っても、聞く耳持たずに部屋に上がりこもうとするから、最近、ちよつと怖くって。幸司さんに頼もうとしても返事来ない上に、これでしょ。だから」

「じゃ、腕の立つひとのほうがいいわよね。何されるかわからないし」

「そうだね。後くされあっても困るけど」

「腕が立って後くされない、か……ちよつと待ってね」

由利が、大きなビジネスバックから携帯電話を取り出してボタンを操作し、耳に当てる。

「あ、もしもし隼人？ 今電話して大丈夫？」

つきあってもうすぐ4年になるうと言うのに、野田さんと電話をする由利は、とても幸せそう。それはきっと、去年のクリスマスイブの前に一度『別れ』を経験して、互いの存在の大きさを実感したからなんだろうな、と思う。

「そうなの？　じゃ、連れて来てよ。うん。待ってる」

「ねえ、まだ籍入れないの？」

電話をしまった由利に、訊ねる。

「うん。向こうの会社が軌道に乗るまであと少しだし。それに、隼人の気持ちはあのとき痛いほどわかったから、焦ったって仕方がないわ」

よりを戻したときのことを思い出したのか、頬を染めて、照れくさそうに由利はつぶやく。

「いいね、由利は。それだけ好きになれる人に出会えて」

「まるで、そういう人が今までいなかったみたいなのぶりね。忘れられない人とかいないの？」

「それが……いないのよね。残念なことに」

ふられた当初は考えることがあっても、その感傷は、日々にまぎれていつしか消えてしまう。

由利と野田さんのように、互いがいなきやダメなんだって言いきれるほど、好きになれる人に出会えたらいいなとは思いつけど、しばらくは無理そうだ。

来客を告げるベルの音がなり、店員さんのマニュアル通りの挨拶が店内に響き渡る。

「由利」

しばらくして、私の後ろから野田さんの声がした。

「ごめんね突然」

「大丈夫。今日は早く終わったんだ」

由利と話しながら紺のネクタイを緩めた野田さんが、隣に腰を下ろす。

「ご無沙汰してます」

「こちらこそ。しっかし君も大変だね」

忠行さんと別れたことは野田さんにも言っていたから、特別問題はないけど……。

由利に席をゆずってもらっている男性をチラッと見上げる。

「……………あ！」

「あれ！？！」

声が重なった。私の目の前に座った黒のジャージ姿のそのひとは、女子高生と一緒に私を助けてくれたあの男性だったから。

「何だ、知り合いか」

「いや。ついさっき会ったばかりですよ。な」

さっきの件を手短に話してくれた彼に、私はうなづく。

「ちよつとあずみ。それはやめなさいって前から言ってるじゃないの」

「仕方がないでしょ。その子の彼氏、かかしみたいに突っ立ったまままで役に立ちそうになかったんだもの」

「まあまあ。話が早く済んでいいじゃないか。こちら、俺の高校時代からの後輩で沢村亮。はつきりしないのが玉にキズだけど、いいやつだよ」

私と由利の間に割って入った野田さんが、咳払いをしてから彼を紹介してくれる。ところが。

「ちよつと隼人さん……そりやないでしょう」

最後の言葉が引つかかったのか、沢村さんが、少し恨めしそうな視線を野田さんに送る。

「で、この子が成瀬あずみ。物ははつきり言うしものすごく気が強いから、怒らせないように気をつけてね」

「由利……そこまで言う？」

これまた最後の言葉が引つかかった私も、呆れて由利を見つめた。「本当のことじゃない。でなきゃ1年足らずで3人ものひとにふられないわよ」

「ふたり！勝手に捏造しないで！」

思わずテーブルを叩いた私を見て、沢村さんが吹き出した。

「大丈夫か？ お前」

お腹を押さえて笑う彼に、笑いをこらえた野田さんが訊ねる。普通にしていって怖がられたことはあっても、ここまで笑われたのは

初めてかも。

ため息をついた私に、笑いが収まったらしい彼が、柔らかな視線を投げかけて来た。そして、野田さんに向き直る。

「隼人さん、俺、このひと気に入った。ふりなんてまどろっこしいことやめて、本当につきあおうよ」

「……………は？」

突然のひとことに、私はもちろん、野田さんも由利も呆然と彼を見つめた。

3 口説かれて

「ちょっと待て、亮。お前、よく考えた方がいいんじゃないのか？」

急に真面目な表情で、野田さんが沢村さんを見つめる。

「何ですかその『よく考えた方が』ってのは！？」

隣を見て声を荒げた私を指さし、野田さんが続ける。

「ほら。怒らすとおっかないだろ？ 去年の年末、由利と修復可能か？ ってときに2時間以上も説教されて、この子の怖さはイヤってほどわかってるんだから」

「確かに。私もひっぱたかれたとき痛かったし、荷物放り出されたときは怖かったもの」

大ゲンカしたときのことを引つ張り出して、由利が小さく笑う。

ふたりの言葉を聞けば聞くほど頭にきて、私は立ち上がる。

「だったら……このひと連れて来なきゃいいでしょう？ 由利も何よ」

「あずみ、どこ行くのよ」

「帰る。彼氏のふりしてくれるひとは、自分で探しますから結構です。沢村さん、ご足労かけちゃってごめんなさい。それじゃ」

沢村さんにだけ頭を下げて、私はコーヒーストップを後にする。

ところが。

「待ってくれよ。俺の話はまだ終わってないんだから」

通路に出た途端、真剣な表情をした彼に突然腕をつかまれた。

「話、って言われても」

「隼人さんや由利さんが何て言おうと、俺自身が君を気に入ったんだから。何か問題ある？」

道行くひとがざわめくのがわかった。そんな風に堂々と言われた

ことのない私は恥ずかしくて、目をそらす。

「……私、あなたのこと知らないし」

「それは俺も同じ。でも、きつとうまくやってけるって思ってるんだけど」

彼の真意が読めない。ただ、野田さんや由利の前で子犬のように吠えてた私のどこがいいんだか。

でも、話を聞くと言わなければこの手を離してもらえそうにない。「わかりましたよ。話、聞きますから……手を離してくれませんか」

「あ、ごめん」

あっさりとは手は離してくれた。だけど。

「どこかご飯食べに行かない？ 話はそこでゆっくりしようよ」

野田さんの嘘つき。何が『はつきりしない』よ。ずいぶんと強引じゃない。

心の中で野田さんに毒つきながらも、私はうなずいた。

「あの……。私のどこが良かったんですか？」

駅ビルの中にある定食屋さんに入っただけなのに、私は訊ねる。

全国にチェーン店を展開するこのお店は、注文を受けてから料理をするのが売り。ご飯はつねにふっくら炊きあがってるし、そのほかのおかずも、厳選された食材を使っているからおいしいと評判で、休日は席を取るのが困難な時間帯もあるほどだ。

「どこが、って？」

ハンバーグ定食とカキフライ定食を注文した彼は、メニューを閉じて問い返してくる。

「いや、だから。野田さんや由利の前でがなり立てただけなのに、どこがいいのになって」

「隼人さんたちに会う前」

「……は？」

「誰もが見て見ぬふりだったあの状況に飛び込んだ、君の強さに感動したんだ」

笑みを絶やさないう彼のまなざしに、思わず胸が高鳴る。

「いや。あれは……。あの彼氏が『かかしくん』じゃなかったら私も素通りですよ？」

頬が熱くなってきた私は、彼から視線をそらす。

「じゃ、そのかかしくんが彼女を守ろうとして困ってても、素通りした？」

「……多分、素通りは出来ない。」

うなずくことができずに肩をすくめた私に、彼は優しくたたみかけてくる。

「だろ？ だから、元力レだけ。そいつが泣き落として攻めて来たら、うんて言っちゃいそうで心配」

意外な言葉に、私は思わず顔を上げた。

今は普通に復縁を迫って来ている忠行さんも、私が断り続ければどんな手を使ってくるかわからない。

力づくで来そうな勢いに怖さを感じて由利に紹介をお願いしたけど、その手は考えてなかった。

図星、かも。

このひと……鋭い。

「あの」

「何でしょう？」

また柔らかな笑顔で、私の方に身を乗り出す。

「お仕事、何されてるんですか？」

「スポーツクラブのインストラクター。前は一般企業で総務の仕事してたんだけど、机の前でじっとしてるのって性に合わなくてさ。去年転職したんだ」

確かに、このひとがスーツ着て机に座っている姿って想像できな

い。

顔が小さいせいか細く見えるけど、着ている黒のジャージからのぞく腕はすごく太いし、体型もがっしりしてるように感じる。

「ところで、どうだろう？ 俺との件は」

「……あ。えっと」

「つきあうって言ってもさ、君の気持ちがかつちに向くまで、その先を無理強いする気はないし。気楽に考えてもらえると嬉しいんだけど」

幸司さんと別れて、まだ1時間も経ってない。

心が痛くてどうしようもないわけじゃないけれど、おつきあい、となると話は別になる。

「でも……私、今日彼氏にふられたばかりだし。そこまでは考えられません」

「そつか。じゃ、彼氏のふりしてくれるひとは？ 心当たりあるの？」

心当たりなんて……あるはずない。

つきあったひとは、ふられてしまえば、電話番号とアドレスを速攻で消すからそれっきりだし。

会社はコールセンターだから、女比率が圧倒的に高いし。

かと言って、連れて来てくれた野田さんにあんなタンカ切っちゃった以上、目の前のこのひとに頼るわけにもいかないし……。

「いないみたい……だね」

ごまかしても仕方がないので、素直にうなずく。

「じゃ、それだけでも俺にまかせてよ。元カレが君のことをあきらめれば、お役御免でいいからさ」

「……でも」

「大丈夫だって。君に変なマネは一切しない。そりゃ、元カレに信じてもらうために、ある程度くっつかなきゃならない場合もあるだろうけど」

変なマネ云々って……そういう問題ではないのだけど。ここまで

言ってくれるんだから、頼ってみてもいいかもしれない。

「いいんですか？」

「それくらいは役に立ちたいな。せっかくこうして出会ったんだし。まあ、そのまま君が俺を好きになってくれれば、なんて期待もないわけじゃないけどね」

「そういう下心は、黙つといた方が賢明ですよ」

「……やっぱり？ 言ってから『しまった！』って思ったよ」

まるで何かに許しを請うように宙を見上げた沢村さんの顔がおかしくて、私は吹き出す。

「かわいい」

「え？」

「さっきも思ってたんだけど、そうやって笑ってる方がかわいいよ」このひとの前で大っぴらに笑った記憶はないのだけど……。あまりにもストレートに言われると、何だか恥ずかしい。

また、頬が熱くなった私は、彼の顔を見れずにうつむく。

「俺、ヘンなこと言った？」

「そんな風に言われること、あまりないから……」

「今までつきあってた奴らに、見る目がなかっただけ。あずみちゃんはおかしいって」

あずみちゃん　そう呼ばれた瞬間、あるひとの顔が脳裏をよぎる。

「その……あずみちゃんってやめてもらえます？　そう呼ばれるの、好きじゃないんで」

「じゃ、何て呼べばいい？」

「あずみ、でいいですよ。みんなそう呼んでるし」

「了解。じゃ、あずみ。……これでいいかな？」

彼の顔を見られないまま、私はうなずく。

「お待たせしました」

グレーの上下に白いエプロンをした店員さんが、注文した物を持つてくる。

「いただきます」

ふたりに声をそろえて、私がハンバーグ定食を、彼がカキフライ定食を食べ始める。

「あの」

「ん？ 何かな？」

カキフライを美味しそうにほおびながら、沢村さんが私を見る。

「沢村さんのこと、何て呼べばいいですか？」

「みんなは亮って呼んでるけど、あずみが呼びやすいのでいいよ」

「じゃ、亮さん……でもいいのかな？」

「うん。大丈夫。そう呼ばれるのなんか新鮮」

そう言い終わると、彼が箸を置いて私に向き直る。

「では。改めて、よろしく。あずみ」

「こちらこそ、よろしく願います」

私が頭を下げると、亮さんが嬉しそうに笑った。

4 戸惑うばかり

「お支払いは一緒ですか？」

食事を終えてレジの前に立った私たちに、店員さんが笑顔で訊ねてくる。

「はい。一緒に」

「いえ。別々でお願いします」

財布を取り出した私の手を、亮さんが押さえた。

「いいよ。ここは俺が払うから」

「そういうわけには行かないの。いくらですか？」

こういうやり取りには慣れているのか、店員さんは顔色ひとつ変えずに、ハンバーグ定食の値段を教えてくれる。

ところが彼は、私とレジカウンターの間に身を割り込ませて、つとと二人分の会計を済ませてしまった。

「ちょっと」

「ありがとうございます」

にこやかな店員さんに軽く頭を下げて、亮さんは勝ち誇ったような表情で私を見下ろす。

その微笑みがなぜか、私には悪魔のように思えた……。

「もう。払うって言ったのに」

定食屋を出て、私の少し前を歩く亮さんの背中に文句を投げかける。

おつきあいしている彼氏ならこういうのはお互い様だけど、このひとはあくまでも『ふり』をしてくれるだけだから、ご馳走になるわけにはいかない。

「いらないうって」

「代金、払いますよ」

手にした財布から千円札を取り出すけど、また押しとどめられる。

「いいってのに」

「よくない！」

イラついて、少し声を荒げてしまった私を見下ろし、亮さんが少し呆れたような顔で大きなため息をつく。

「あずみ、彼氏に甘えるってしないだろ？」

「甘えないことはない……と思うんだけど。」

「いいや。絶対に甘えないタイプ。何でそんなにつっぱっちゃうかな」

首を横に振る私に、断言する。

「つっぱってなんかいません」

「本当に？」

立ち止まった彼が、私の顔をじつと覗き込んだ。

「ちよっ……顔、近いって」

道行くひとが私たちに注目してるのを感じて、私は一步後ろに下がった。

うつたえた私を、まるでおもちゃを見るような目つきで亮さんが見つめる。

「やっぱいいな。あずみって、俺の周りにはいないタイプ」

「何ですかそれ」

からかいの色を含んだ言葉にムツとした私は、頬をふくらませて顔をそむける。

「俺の周りは女の子の子してる子が多かったの。いるじゃない。男の前でだけ、露骨に自分を可愛く見せようとするタイプ。ああいうのダメなんだよね」

「あ、それわかる。私もそういう子ダメだなあ。子供の頃、けっこういじめられたし」

「そうなの？」

「そう。私も負けませんでしたけどね。三倍返し」

思わず握りこぶしを作った私を見て、また、亮さんが笑う。

「ちよつと……笑いすぎ」

「いやあ……実に面白いわ。つきあったらマジで楽しい日々になりそう」

「楽しい、だけで私に近づかない方がいいですよ。痛い目見るから」

「またそういうこと言う。あまり自分を落とさない方がいいって」

「事実を述べただけ。そう言って近づいて来た男は、だいたい逃げてったから」

今日別れた幸司さんにしろ、復縁を迫ってくる忠行さんにしろ、告白してくるときの決め台詞が「一緒にいたら絶対に楽しいと思う」。

で、ケンカした途端にはいさよなら。別れるときの決め台詞は「あずみは強いから、ひとりで大丈夫」だもの。

「そういう奴らって自分が一番かわいいんだよ。プライドだけが高くてさ。俺から言わせりゃ、女とつきあう資格なしだね」

ずいぶんと手厳しいこと。

「じゃ、亮さんが認める男性像って？」

「隼人さんみたいなひとかな。惚れた女のために自分の出世コース棒に振っても、それを受け入れて前に進む。かっこいいよな」

「去年のこと、聞いてるんだ」

遠い目をしていて亮さんが、うなずく。

「うん。今年入ってからね。由利さんを連れて行くバーで飲んだときに聞いた」

由利から別れを告げられて、今まで彼女の思いにあぐらをかいていた自分を責めた彼は、会社命令だった交渉を自ら降りて社長の逆鱗に触れて、子会社に出向になった。

そこはリストラ最前線の厳しい場所だった。でも、由利とよりを戻して婚約した野田さんは俄然張り切って、その社長をはじめとした、社員全員の意識改革を促すことから始めた。時間がかかってイライラすることもあったそうだけど、結果、売り上げを前年の三

倍以上に押し上げたらしい。

それでも、本社にいたときのように仕事一辺倒ではなく、その仲間とバーベキューをしたり、由利との時間も大切にしている。

今交渉中の案件が成立したら、本社に戻るかもしれないと噂されてるって由利が言っていたっけ。

「納得。彼みたいな男性に長く愛される女性って幸せよね。うらやましいな」

「あずみにはそういうひと、いなかったの？」

「由利が言ってたじゃないですか。1年に3回も彼氏が変わるって」「正確には2人、だろ？」

しっかりと訂正してくれた彼に、私はうなずく。

「あたりが悪かったただけだよ。気にすることないって」

「そうかなあ。去年も同じくらいふられた気がするんだけど」

「じゃ、長く続いてどれくらい？」

下りのエスカレーターに乗った亮さんが、2段上の私を見上げる。

「1年……もつかもたないか？」

「なるほどね。確かに短いかも」

ズバツと言われて、私は思わずため息をつく。

「どうやったら長持ちするのかなあ……。やっぱ、自分を抑えなきゃダメか」

「そりゃ違うよ。あずみが我慢して長持ちさせたって、そんなの幸せじゃない。隼人さんと由利さんだって、去年まで派手なケンカはしょっちゅうだったし」

「それは、野田さんが辛抱強いから。じゃなきゃ、あんなに長持ちはいらないでしょ」

「そうじゃないよ。隼人さんの方が由利さんに惚れてるから」

「そうかな？ 由利の方が野田さんにベタ惚れのような気がするけど」

エスカレーターを降りようとした私の手を、亮さんが取った。

「あ、ありがとう」

「いいえ。まだ時間ある?」

帰っても特別することのない私がうなずくと、彼がにつこり笑った。

「じゃ、コーヒー飲んで帰ろうよ。今度はおごって?」

さっき言ったこと、気にしてくれてるんだ。

「わかった」

うなずいた亮さんの手に引かれて、ついた先は私の好きなお店。フロアの隅にある小さな空間だけど、モダンな雰囲気と、豆から挽いたコーヒーの香りが疲れた心を癒してくれる。

「いらつしゃいませ。あら、いいひと?」

繋がれた私たちの手を見て、眼鏡をかけたやせ形のお姉さんが笑う。

「そんなんじゃ……ないんだけど」

「ついさつき立候補したんです。あとは彼女の気持ち待ちかな?」

「いつもの席、空いてますからどうぞ」

立ち入ったことを何も訊いて来ないお姉さんに案内されて、一番奥の隅っこに座る。

「ここの常連なんだ?」

「うん。仕事に疲れたときなんかふらつと入るの」

「そういえば、あずみの仕事って何?」

大手通販会社の名前をあげる。

「そのコールセンターで働いてるんです。もう長いから、商品の受注から苦情対応まで、何でもござれですよ」

「そりゃストレスたまるわ。その発散を彼氏にしてる……とか?」

「そんなんじゃありません。失礼しちゃうな」

頬をふくらませた私を見て、また亮さんが笑う。

「そんなに私って面白い?」

「うん。表情がコロコロ変わる。見てて飽きないっていうか、もっと見ていたい、かな?」

私をじつと見つめて来る亮さんに、また、胸が高鳴った。

「……もう。そういうことは」

「隠しとく方が賢明、だろ？」

「先回りしすぎ！」

思わず身を乗り出した私を見て、今度は大笑いする。

「いい加減にして下さいよ。ひとをからかうの、そんなに面白いですか！？」

カチンときた私は、少し低い声で彼に訊ねた。

5 落ち着かない心

「あなたは私をからかうのが面白いかもしれないけど、私は面白くも何ともないです」

言葉に怒りがこもったのがわかったのか、亮さんの表情が変わる。「そんな風にされてまで一緒にいてもらおうとは思いません。元力レのことは、自分ひとりで何とかします。それじゃ」

一礼をしてカバンを抱え、伝票を持って立ち上がる。

「……ごめん！」

出口に向かって歩き出した私の後ろから、声がする。

「そんなつもりはなかったんだ。ただ、君と話していると楽しくて、つい……。本当に、ごめん」

頭を下げた状態のまま、彼は動かない。

過去につきあったひとはみんな、私が強く出ると無口になるか、そのままケンカに発展してしまっていたので、こんな風に頭を下げられたことがないから、正直、どう反応したらいいのか……。

いつもの私なら、当然、このまま帰る。でも。

立ち尽くす私の後ろから、お姉さんが肩を叩いて来た。

私を見つめる穏やかな目は『許してあげなさいよ』と言っている。振り返って、未だに動かない彼を見た私の心が、痛む。

からかわれる。そんなささいなことで怒ってしまった自分が、情けなく思えてきた。

私は、亮さんを見たままお姉さんにうなずいて、席に戻る。

「あの……顔、上げてください」

それでも、彼は動かない。

「もう、怒ってませんから。それに、私こそ……すみませんでした」

「何で、君があやまるの？」

頭をあげて、問い返してきた彼の態度は変わらない。

「だって……」

「いいんだよ、気にしなくても」

「でも」

「調子に乗った俺が悪いんだ。実は……今日、会う前からあずみのこと、隼人さんから色々聞いてて。一度会えたらいいなって思ってたのもあるし、さつき、ああいう姿見せられたらなおさら、何て言ったらいいのかわからないけど、ワクワクしちゃって」

恥ずかしそうに肩をすくめて一気に言うと、亮さんはグラスの水を飲み干した。

「本当にごめんね。今度から、なるべくしないように気をつけるから。元カレのこと、ひとりで何とかしようなんて思わないで」

優しい目でそんな風に言われてしまったら、ノーとは言えないじゃないの。

私は、何も言えずにうなずいた。

「お待たせしました」

お姉さんが二人分のブレンドコーヒーと、小さなクッキーを皿に乗せて持ってきた。

「これ、手作りですか？」

「そう。今日は特別サービス」

亮さんの質問に、お姉さんは意味ありげな顔でにっこり微笑んだ。それを知ってか知らずか、亮さんがクッキーを口に放り込む。

「おいしい」

「よかったら、コーヒーと一緒に食べてみて」

お姉さんの言葉に、今度は私が試してみる。

「おいしい。すごく合う」

「そう、よかったわ」

頬が緩んだ私を見て、お姉さんが嬉しそうに顔をほころばせた。

「それじゃ、ごゆっくり」

軽く会釈をして戻って行く後ろ姿を見ながら、私はもう一枚口に運ぶ。

ここのお姉さんは、いつもそう。

私が本当に疲れてるとか、心の動揺が見えるときはいつも、こうして甘いお菓子を持ってきてくれる。それでいて、立ち入ったことは何も訊いて来ない。

「よかった」

「何が？」

「コーヒーを一口飲んで、訊ねる。」

「あずみが笑ってくれて。こんな気まずい状態で家に帰ることになったら、どうしようかと思った」

「照れくさくなった私は、少し肩をすくめて視線をそらす。」

「これ、もらっていい？」

「私がうなずくと、亮さんは最後の1枚を口に放り込み、コーヒーと一緒に飲み下す。」

「ごちそうさま。そろそろ帰ろうか。帰りは車？」

「免許持っていないから、電車なんです」

「そつか。じゃ、家まで送るよ」

「ポケットから車の鍵を取り出した亮さんに、あわてて首を振る。」

「あ、いいですよ。そこまでしてもらう必要はないし」

「何言ってるの。便宜上とはいえ、今、俺は君の彼氏でしょう。彼女をひとりで帰すなんてもつてのほか」

「私の家、駅から近いし。大丈夫ですって」

「そういう問題じゃないの。家の前で元カレが待ってたらどうする？」

「言葉に詰まった私を見て、亮さんがまた『悪魔の微笑み』を見せる。」

「決まり……だね。行くよ」

「私の手を取った亮さんに連れられ、レジへ行ってお金を払う。」

「ありがとございました」

「目を輝かせたお姉さんに見送られて外へ出たあとも、彼は手を離してくれない。」

「あの、離して下さいよ」

「離したらそのまま自分で帰っちゃいそうだから。申し訳ないけどダメ」

「そんなことしませんってば」

「却下」

いくら『送ってもらおう』と言っても、亮さんはどうやら信じてくれないらしい。私は、彼に手を握られたまま、後についていくなかった……。

『へえ。沢村くんもやるわね。あんたを丸め込むなんて』

家に着いてすぐ、由利から電話がかかってきた。

キッチンにある椅子に座り今日のことをかいつまんで話すと、電話の向こうから彼女の楽しそうな声がする。

「笑いごとじゃないわ。野田さんに嘘つきって言うついて」

『何でよ?』

「はつきりしないなんてとんでもない。笑われるし、からかわれるし、はたまた無理やり手をつないだまま、離してくれなかったんだから」

言い終わらないうちに、由利が大声で笑い出した。

『そのときのあんたの顔、見てみたかったなあ。今度隼人と4人で遊ぼうよ』

「けっこうです!」

『……え? 何?』

笑い続ける由利の後ろで、野田さんの声がした。しばらくやりとりが聞こえたあと、彼の声が耳に届いた。

『もしもし。亮にしてやられたって?』

野田さんの声も由利と同じ……いや、それ以上に楽しそうだ。

「さすが野田さんの後輩ですよ。してやられたって感じです」

嫌みたっぷりに言っただつもりだったけど、意に介した様子はなし。

『普段は割とおとなしいやつなだけだなあ。よほど君に惹かれた、か』

「どつという意味です？」

『好きな女の前だと下手に頑張っちゃうタイプなの、あいつ。もつと肩の力抜けて言うんだけどね。それで、両思いになる前に何度ふられたか』

「そつ……なんですか？」

私の頭の中で、今日の亮さんの行動と野田さんの言葉がなぜか一致する。

『うん。でも、そういうのをのぞけば本当にいい奴なんだよ。君みたいなタイプにピッタリ。俺が保証する』

「何ですかその『君みたいなタイプ』ってのは。だいたい、あなたが私のこと彼に何て言ったか知りませんが、からかいのタネになるようなこと言わないでもらえます？ おかげで大変だったんだから」

由利には言わなかった『怒りをあらわにした件』をまくしたてる。

『……ごめん。それは俺が悪かった。今日のことは、俺に免じて勘弁してやって。しつこいようだけど、本当にいい奴だから。ね』

「はあ……はい」

『じゃ、そんなことでよろしく頼みます』

電話が、切れた。

何なんだろう。

私が亮さんに求めているのは、『彼氏のふり』をしてくれること。それだけ。

なのに、野田さんのプッシュはずいぶん大きい。まるで、『本当の彼氏』になるひとを紹介するかのように。

そりゃ、いいひとだとは、思う。

初めて会ったとき、あんなところを見せた私に『女の子なんだから』って諫めてく^{いさ}れて。

怒りをあらわにしたときだって、あんな誠実にあやまってくれた

のは、彼くらいだし。

きつと、彼氏になつたらすごく頼りがいがあるんだろうな、って思う。

だけど、ねえ……。まだそこまでは考えられないし、今は、忠行さんをうまく遠ざけることだけ考えた方がいいか。

天井を見て、大きく息を吐き出した私の手にある携帯が、震え出す。

メタリックブルーの携帯を開いて見ると、亮さんの番号が表示されてる。

「もしもし」

『さつきはどうも。元カレ、来てない？』

「大丈夫ですよ。電話も来てないし」

『そっか。明日、都合どうだろう？ また、晩ごはん一緒に食べない？ もちろんワリカンで』

別に断る理由もない私はOKして、明日、仕事が終わったら連絡することて話をまとめて、電話を切った。

6 元彼 vs 今彼！？

次の日。午後6時。仕事を終えた私はすぐに亮さんに連絡を取って、昨日初めて会った駅ビルで待ち合わせの約束をした。

仕事帰りだし、ご飯を食べに行くだけけど、さすがに2日連続で普通のTシャツとジーンズじゃ味気ない。だから、袖なしの青のタートルネックの上に白の夏用カーディガン、下は水色のスキニージーンズにした。

「お待たせ」

肩を叩かれたので振り返ると、黒のインナーの上に白の夏用ジャケットを羽織った亮さんが、すぐ近くに立っていた。

「うっん。私も今来たところだから」

「そう。今日はどこに行く？ 食べたいものあるかな？」

「亮さんは？」

「あずみにおまかせ。ちなみに今日の昼は牛丼」

私もお昼は、会社近くのお弁当屋さんで買った天丼だった。

「それじゃパスタでいい？ 由利とよく行くお店で、美味しいところがあるんだ」

指でOKサインを作った亮さんの横に並んで歩く。

「昨日と何か雰囲気違うね」

「そう？ そんなに変わらないと思うけどな」

「髪型が違うからかな？ 昨日結んでただろ」

去年の冬に切った髪の毛が、ようやく肩の下あたりまで伸びた。

一時期は由利と変わらないくらい短くしてたけど、アレンジ出来ないのはやっぱりつまらない。

「仕事するとき邪魔だから、結ぶようにしてるの」

「今日はしなかったんだ」

「うん。せっかく会うのに、2日連続で同じカッコじゃつまらないかなあと思って」

「気、遣ってくれたんだ」

亮さんが嬉しそうに笑って、私の手を握った。

その仕草があまりにも自然だったので、感じたぬくもりで気づいた私は、繋がれた手に一瞬だけ視線を落として彼を見上げる。

「迷惑、ですか？」

甘えるように見つめてくる亮さんの顔に、思わず頬が緩む。

「仕方がないなあ、もう」

私は小さく息を吐き、亮さんの手を握り返す。にっこり笑った彼と顔を見合わせたとき、携帯電話が鳴る。

「あ、ごめんね」

彼の手を離し、携帯電話のディスプレイを見る。

すると、先週からしょっちゅうかかってきている番号が表示されていた。

また、か。

小さくため息をついた私はそのまま電源を落とす。

「出なくていいの？」

「いいの。行こう」

今度は私から彼の手を握り、ビルの出口に向かって歩いて行った。

「あの店美味しかったな。また今度行こうよ」

大通りから、私の部屋に向かう小道に入る曲がり角でハンドルを切った亮さんがつぶやいた。

「よかった。気に入ってもらえて。それにしてもよく食べるね」

去年のクリスマス前、由利が連れてきた会社の後輩の男の子もよく食べたけど、亮さんはそれ以上に食べる。

「そりゃ、毎日肉体労働ですから。食べないとたないの」

「そんなに大変なの？ スポーツクラブのインストラクターって」
「まあね。小学生の水泳のクラス持ってるし。あとは、週3回空手教室に通ってるから、とにかくヒマあれば身体動かしてる。あずみは？ 何かスポーツしてる？」

「最近は全然。学生の頃はあっちこっちの部活の助っ人してたから、運動神経は悪くないと思うけど」

「じゃ、今度おいでよ。たっぷりしごいてあげるから」

「ええ？ そこは優しく教えてくれるところでしょ」

「甘いね。俺けっこうスパルタよ」

私をチラッと見た亮さんが、意地悪な笑みを浮かべる。

「そんなんだったら行かない」

「却下。強制連行」

「ひどい」

わざと頬をふくらませた私を見て、亮さんが笑った。

「あずみにはそんな風にしないから、本当においでよ」

「本当にスパルタなの？」

「まあね。飴とムチは使い分けてるつもりだけど、先輩に言わせると『厳しい』らしいよ」

「へえ……」

優しい亮さんの厳しい一面。見てみたいような気もする……けど。

「まさか子供と一緒に泳ぐの？」

「いや。俺の名前で体験って形にしておけば大丈夫。個人レッスンもしてるし」

「じゃ、今度の土曜日休みだからお願いしていい？ 久しぶりに泳ぎたいな」

「了解。あずみの名前で予約入れとくよ」

小さい頃は実家の近くの海でよく泳いでいたけど、こっちに来てからはプールも行っていない。

仕事して、少しどこかに立ち寄って帰るのが定番。彼氏がいればデートもするけど、今までスポーツなんてしたことなかったから、

少し楽しみだ。

「あれ？ 誰か立ってるよ」

「どこ？」

「あの電柱の陰」

自宅マンションのすぐ角にある電柱に、誰かが立っている。

少し細身のあのシルエットは…… 忠行さん、か。

ため息をついたのがわかったのか、通行の邪魔にならないところに車を止めた亮さんが、私の手を強く握る。

「大丈夫。俺がいるから」

その言葉だけで、私の心がほぐれていくのがわかる。

車に私が乗っていると気づいたのか、忠行さんがこっちへ向かって歩いて来た。

「どうしたの？ こんな時間に」

車から降りて、私は訊ねる。

「話がしたくてさっき電話したんだけど、出なかったから」

穏やかに言う忠行さんの恰好は、いつも着ている品のいい上下のスーツとは違って、白のポロシャツにダボツとしたグレーのパンツ足にはサンダルと、まるで、近所に買い物に出ました、っていうようなラフな服装だ。

「その人は？」

忠行さんの視線が、私の横に並んだ亮さんへと移る。

「私の…… 彼氏」

「彼氏？」

大きな目をさらに見開いた彼の顔が、少し険しくなったように感じる。

「はじめまして。沢村といいます」

私の手をまた握りしめて、彼が頭を下げる。

「大村、です。どうも」

忠行さんもつられて頭を下げる。でも、その表情にいつもの余裕はなく、動作もどこことなくぎこちないように感じる。

「このひと……だっけ。今の彼氏って」

「うん、そう。彼が忙しかったからしばらく会ってなかったけど。それが？」

幸司さんのことをすっ飛ばして、早口で説明する。

「いや……別に。違うひとだと思ってたから、驚いただけだよ」

「話って何？ よりを戻したいって話なら、私の答えは変わらないけど」

「あずみ。俺は」

「あなたとはもう終わったの。前にもそう言ったはず。ちゃんと、彼女を大切にしていあげなきゃダメじゃない」

「あいつは……俺には合わないんだよ。あずみと別れて、そのことが身にしみてわかった。だから」

「そんなのあなたの勝手でしょ！？ 私と別れる時、何て言った？」

『俺にはあずみは合わないよ。守ってあげたいと思える子が好きなんだ』

そう言っ、私の手を離したくせに。

それが、二股かけてた言い訳だって知ったのは、別れてすぐあとのこと。

仕事が終わった帰り道、夕食のおかずを買おうと入ったデパートの地下。

肩を寄せ合っ、1つのカゴに2人分の食料を入れていたあなたと、背中まで伸ばした黒髪が良く似合っ、小柄な彼女。

「あなたたちを見かけたデパートで、わめかなかっただけ感謝してほしいくらいよ」

「あずみ。そこまで言うことないだろう」

なおも言い募るうとする私を、亮さんが慌てた様子で止めた。

「亮さんは黙っ。だいたいね、あなたは勝手すぎるの。自分の思い通りにならなければはいさよなら。それだけならまだしも、さ

よならする前に違う女に手を出して二股かけた拳句だもの。そんなひとより戻そうなんてだれが思うのよ!？」

「あずみ！ よせって」

亮さんが私の肩をぐっと引き寄せた。

忠行さんの顔を見ていたくなくて、そのまま亮さんの方に視線をそらす。

「あずみの答えはもう出てるんです。これ以上、俺らの前に姿見せないでくれませんか？」

背後で、小さな舌打ちをする音が聞こえた。

「俺のついているスキは、今のところないようですね。でも沢村さん、あずみはかなり性格がキツイ女ですから、あなたもプライドが傷つけられないように、気をつけるんですね」

カッとなった私は、思わず拳を作って振り返ろうとした。

そんな私を力で抑えて、亮さんが冷やかな口調で忠行さんに返す。「ありがとうございます。つきあった期間はまだ短いけど、俺、今のあなたよりは、あずみのことをわかってる自信ありますから。ご心配なく」

亮さんのはつきりとした口調に驚いた私は、思わず彼を見上げた。

7 抱きしめられて

『今のあなたよりは、あずみのことをわかってる』

そういった言葉が返って来ると思わなかったのか、忠行さんは何も言わなくなった。

もちろん、私も。

恋人のふりをしてくれてるとはいえ、そこまではつきり言ってくれるなんて。

その気持ちが嬉しくて、亮さんが着ているジャケットの腕の部分を握りしめる。

しばらくの沈黙のあと、忠行さんの荒々しい足音が遠ざかっていくのが聞こえた。

「何だあれ。いけ好かない奴」

私の気持ちを代弁してくれたのか、亮さんが、わざと大きな声で口にする。

「どうした？」

「……え？」

「呆けたような顔してるけど」

笑いをこらえた亮さんに指摘されて、私は思わず頬をさわる。

「……あ、あんな風に言ってくれるなんて思わなかったから」

亮さんの言葉を改めて思い起こした私は、急に恥ずかしくなってしまう。

「当然でしょ。俺、君の彼氏よ」

「『便宜上』のね」

「それ言っなよ。せつかくいいムードなのに」

肩を強く引かれて、今、彼の腕の中にいるのだと改めて気づく。

「ち、ちょっと！ 離れてよ」

「冗談。そう言われたからって離すほど、俺いいひとじゃありません

ん」

そのまま背中に腕を回されて、『本当に』抱きしめられる。

「亮さん！ こういうことは、しないんじゃないかなかったですっけ！？」

逃れようと力を込めても、鍛えている彼はまったく動かない。

「少しいいから、こうしてよ。あいつがそばにいるかもしれないし。ね」

耳元でささやく声に、身体が小さく震える。

……ずるい。

忠行さんの名前を出されたら、こうしていなきゃならないじゃないよ。

私は仕方なく力を抜いて、彼の腕に身をまかせた。

亮さんの胸の鼓動を頬に感じて目を閉じると、重みが伝わったのか、彼の手が頭を優しくなでてくれる。

そういえば……。

こんな風に抱きしめてもらったこと、今までなかったな。

出会いはだいたい合コン。意気投合したひとつきあうとあまり期間を置かずにベッドを共にしていたから、キスはもとより、抱きしめられること自体、そのときが初めてってことも多かった。

そうになると、男はだいたい先を急ぐから、ぬくもりを感じるひまはあまりなく、すぐに快感の波に飲み込まれてく。

考えたら私……そんな恋愛ばっかりだ。

ひとりのひととじっくり向き合うことってなかったかもしれない。くっついてふられて、少し経ったら合コンで彼氏を見つけて。

その、繰り返し……。

どのくらいの時間が過ぎたのか。

思いに沈む私の身体から、亮さんがそっと離れた。

「それじゃ、おやすみ」

「おやすみなさい」

顔を見られない私の頭を軽く叩いて、亮さんが車のドアを開けた。
「明日、俺、遅番の先輩とシフト変わったから迎えに来れないんだから、あいつには気をつけてな」

「うん。わかった」

「今夜、泊まるうか？」

「……は？」

訊かれた意味がわからなくてじっと見つめる私に、亮さんが顔を近づけて来る。

「そんな寂しそうな顔されたら帰れなくなる。次は襲っちゃいそう」

「……スケベ！ さっさと帰れ！」

顔を熱くして叫んだ私をからかうように笑って、亮さんが車に乗り込んだ。

エンジン音を立てて走り去る車を見送りながら、私はつぶやく。

「亮さんの、バカ」

「まったく、信じられない。あのひとつたら」

お風呂から上がった私は、何度目かのつぶやきを口にしながら、冷蔵庫から缶チューハイを取り出した。

広い間取りのキッチンの真ん中にあるテーブルに乱暴にそれを置き、おつまみ代わりに作ったサラダを隣に置く。

椅子に腰を下ろしてプルタブを開けて一気に流し込むと、のどに、レモン味の炭酸がしみ渡る。

大きく息を吐き出して、私はまた、心の中で毒つく。

野田さんの嘘つき。

何が普段はおとなしいよ。何がはつきりしないよ。

思いつき手が早いじゃない。

忠行さんの名前を出せば、何でも許されると思ったら大間違いなんだから。

サラダと一緒にチューハイを流し込み、今度は小さくため息をつく。

でも……いやじゃ、なかった。

私をすっぽりと包んでしまった腕は、とてもたくましくて。

頬にふれた胸は、見た目よりやわらかくて、すぐく居心地がよかった。

どんなに力を入れても微動だにしないこのひとになら、すべてを預けても、私を力強く支えてくれるんだろっな、って素直に思えた。こんな出会い方じゃなければ、きっと……。

持っていた箸が、大きな音を立てて床に落ちる。

……ちよつと待て。今、何を考えてた？

私は大きく首を振る。

幸司さんにふられて、まだ2日。

忠行さんともきつちり話をつけなきゃならないのに、亮さんとのことを考えてる場合じゃないでしょ!?

心にわいた感傷を振り払うようにチューハイを飲み干し、そのまま奥のリビングへ入る。

キッチンより狭い部屋の奥に設置してあるベッドに横になり、目を閉じた。

「成瀬さん！」

翌日、仕事を終えて、白のＴシャツとジーンズに着替えた私に、『フロア内一うるさい』と言われてる後輩の、山田美和ちゃんが駆け寄って来た。

肩まで伸ばした髪は思い切りたてロール。メイクも今のギャル風で、何かと男性の噂が絶えないこの子は、仕事もそれなりで私によく力ミナリを落とされてる。

「どうしたの？ そんなに慌てて」

「すつごくかつこいい男性が、成瀬さんを待ってるんです！」
「はあ？」

今、私を待つ男性といえば、亮さんしかない。でも、彼は今日遅番だから迎えに来るはずはない。

かといってそう心当たりもない。けど……。

「ね、そのひとどんなひと？ メガネかけてた？」

忠行さんを警戒して訊ねた私に、山田さんは答えることなく腕を引つ張る。

「もう！ 成瀬さんもすみに置けないんだから」

「ちよつと、ひとの質問に答えなさいよ！ 山田さん！」

控室のある地下を抜け、建物の裏側にある職員通用門から表に出る。

すると……。

「野田さん」

ネクタイをゆるめた野田さんが軽く手をあげて、こっちに歩いて来た。

「どうしたんです？ 仕事は？」

彼が今いる会社は、ここから車で１時間半はかかるのに。

「今日は近くで打ち合わせがあったんだ。で、直帰」

野田さんが言い終わらないうちに、山田さんがひじをつついてき

た。

「あのね。このひと婚約者持ち。あなたが思ってるような関係じゃないって」

クギを刺したつもりだったんだけど、逆に彼女の目が輝き出した。私と野田さんを、興味本位な目つきでなめまわす。

「……ったく。変な探り入れるのは止めて、さっさと仕事に戻りなさい！」

少し声を荒げると、彼女の肩が小さく震えた。バツの悪そうな顔で一礼して、駆け足で建物へ戻って行く。

「おっかねえ。さすが『伝説の女』だな」

口調とはうらはらに、頬を緩めた野田さんが私の顔をじっと見る。「何ですかその『伝説の女』っていうのは」

「由利いわく、本社じゃ有名ならしいぞ。営業の猛者を一喝して、野田を拉致した女って」

………呆れてものが言えない。

何でそれごときで『伝説』扱いされなきゃならないのかが理解できない。

「それで、私に何かご用ですか？」

反論したら余計に煽られそうで、とっさに話題を変える。

「いや。あいつに……亮に頼まれたの。迎えに行つてやつて欲しいって」

8 野田さんの迷い

「亮さん……が？」

野田さんの口から彼の名前が出たことに、私は少し驚いた。

「そう。昨日、元カレ……確か大村って言ったっけ。家の前にいたんだって？」

「はい」

「昨夜、帰ってすぐだろうな。亮から電話かかって来たんだよ。元カレがまた君に会いに来たら困るから、もし時間が合えば迎えに行つてやつて欲しいって」

私のこと……そこまで気にしてくれるなんて。

今まで感じたことのない妙な気持ち心がくすぐり、頬が熱くなる。

「愛されてるねえ」

「そ、そんなんじゃないかもしれませんって」

「いや。俺はそうは思わないね。亮のやつ、完全に惚れてるな。君だって、まんざらでもないだろ？」

怪しい光をたたえた目で、野田さんが私を見下ろす。

「違いますってば！」

精いっぱい否定する私がよほど面白いのか、野田さんがお腹を抱えて笑い出す。

「いやあ、そんな成瀬さん見るの初めてだな。実に面白い」

……さすが亮さんの先輩。言うことが一緒だ。

「私はコメディアンじゃありません。他人のこと気にしてるヒマがあつたら、由利とのこと、きちんとしたらどうです？ もうすぐ本社に戻るんですよ？」

ため息混じりに反論して由利の名前を出したとたん、今までニヤニヤしていた野田さんの顔が曇る。

「ちよつと、またケンカしたんですか？」

「いや……そうじゃないんだけど。今日、空いてる？」

「私は別に。でも」

「由利、明日まで名古屋に出張なんだ。今晚はフリーだから問題ないよ」

私の心配を察知したのか、野田さんが指でOKサインを作る。

「なら、いいですけど。何かあったんですか？」

「ちよつと、ね」

少し顔をこわばらせて、野田さんがうなずいた。

有料駐車場に停めた野田さんの車から降りて歩くこと5分。

隣に『レインボー』と書かれた、こじんまりとした店のドアを野田さんが開けた。

「やあ、いらつしやい」

口ひげがよく似合うマスターが、私を見て一瞬眉をひそめる。

「いつものとこ、空いてる？」

「今日は予約入ってるんだ。それより、また由利ちゃん泣かす気かい？」

野田さんの隣に立つ私に目をやって、マスターが訊ねてくる。

「この子、由利の親友。で、前に話した俺らの恩人。だから問題ないよ」

「そうか。失礼したね。こっち空いてるよ」

軽く会釈してくれたマスターに通されたのは、カウンターの隅っこ。

「ここ……もしかして」

「そう。去年のクリスマス前に、由利に別れを告げられたきつかけの店」

「人聞きが悪いな。あれは、約束を破った君が悪いんだろ」

ワインのコルクと同じ材質のコースターを置きながら、マスター

が苦言を呈してくる。

「はいはい。俺が悪うございました。マスター、何か軽く作ってくれる？　俺ウーロン茶で。成瀬さんは？」

「ジンジャーエール」

マスターが笑顔でうなずき、カウンターへ入ってグラスを手に取る。

「で、何です？」

早速私は切り出した。こういうのはパツパと訊かないと、言う気無くすひとが多いから。

「うん……」

軽く握った手の上にあごを乗せて、野田さんがため息をつく。

マスターが、頼んだ飲み物を差し出してきた。動かない野田さんの分も受け取って、隣を見る。

「もしかして、本社に戻れなくなった、とか？」

「いや。その逆。本社に戻るのやめようと思って」

「え？　どうして？」

野田さんの言葉に驚いたのか、マスターも彼を見る。

「本社にいるときより楽しくなっちゃってさ。どんどん成長して行く奴らと一緒に、あつちでトップを取りたくなっただ」

「そんな……本社でもそれは出来るんじゃないの？」

非難を含んだ私の問いに小さく笑って、野田さんがウーロン茶を口にする。

「もちろん、上に行くって点では同じだよ。でも……本社では独りなんだ。誰も頼れない。スキを見せたら寝首をかけられるし、気の休まるヒマがない」

つぶやいた野田さんの顔が、真剣になった。

「去年、成績がトップになってからずっと、精神的に落ち着かなくてね。由利との約束の日はすっぱかす。それ以外の日にフラツと行って、自分の思いのままにあいつを抱く……今考えたら最悪だったよ」

去年、クリスマス前の由利の様子を思い出す。

自分もそうだから、と忙しい彼を責めることはなく、それでいて自身の気持ちが見えなくなっていたように、私には思えた。

彼女が野田さんに別れを告げた理由 約束を破られたこと

は、ほんのささいなきっかけで、きつと由利の中では、彼への信頼がすでに揺らいでいたのかもしれない。

「今も忙しいのは変わらない。残業だって多いし、あいつと逢える日は本社にいたときより少ない。でも、仲間がいる。『みんなで作ってる』って実感がすごくあって、楽しい。それが由利との関係にもいい影響を与えてくれる」

前を見た野田さんの目が輝いた。

「由利に、それを話したんですか？」

ジンジャーエールをひとくち飲んで訊ねると、また、表情が曇った。

「いや。まだ」

……またですか。去年のクリスマス前もそうだったじゃないよ。

「ちょっと、言うひと違うんじゃないですか？」

カチンと来た私の口調に驚いたのか、マスターが目を丸くした。

「そうなんだけどね。あつちに残るための問題が、収入面」

「収入面？」

「あつちでの給料は、本社にいたときの約半分だ。今はほとんど家に帰ったらバタンキューだから何とかまかなえてる。けど、結婚して子供が出来たら、あいつは仕事を辞める気にいるらしいし、俺の給料だけじゃ食べて行かない」

一気に吐き出して、野田さんがウーロン茶を飲み干した。マスターがグラスを受け取って、新しいのを用意する。

「ぶつちやけると、由利の営業先に、俺が年末に降りた案件の責任者が乗り込んで、件数減ってるらしいんだ」

「え？ それ初耳。由利に聞いたんですか？」

「いや、後輩の松田から。ほら、俺から由利をかつさらおうとした」

「ああ。真面目くん」

彼のことはよく覚えてる。会ったびにいちいち礼儀正しく接してくれたものだから、真面目くんとからかって、よく由利に注意されたっけ。

「君はそう呼んでたんだ。あいつもね、早く由利と結婚して、ストレス軽減してやれって突っついて来てるんだ。それより早く彼女見つけろってね」

真面目くん……もとい、松田くんの話になりそうな野田さんを引き戻すために、私はあえて訊ねる。

「その、由利の営業先に来てるひとつで確か『魔性の女』でしたっけ？ 野田さんにモーションかけてた」

由利とばったり会ったとき、一度だけすれ違ったことがある。すごいキツイ顔をした、いかにも男受けを狙ってる感じの女だった印象しかないけど。

あんなひとに色仕掛けで攻められたら、男はひとたまりもないんだろう。由利は、そういう仕事を何よりも嫌う。実力主義だから。

「そう。何でもここに由利と来たときに『つぶしてやる』宣言してったらしいから。そのあおりをモロに食らってるって感じ。俺には絶対言わないけどな」

事情を知っているのか、マスターもうなずいた。

よりを戻しても、大事なことを言わないのはお互い相変わらず……か。

このままじゃ、また去年と同じことの繰り返しになりそうだ。

ちよっと、ハッパかけてやるか。

「じゃあ、野田さんから言えばいいじゃないですか。俺が、今の場所で養ってやるから仕事辞めろって」

「あのね、それができそうにないから悩んでるの。さっき言ったじゃないか」

ため息混じりに私を横目で見た彼に、私は次なる一手を繰り出した。

「悩んでるヒマあったら、私に話す前に、さっさと由利に言ったらどうです？ それとも彼女は『本社でトップにいるあなた』に惚れてるんでも？」

「ちよつと！ えつと……」

慌てた様子で止めに入ったマスターに構わず、私は続けた。

「あ、成瀬といます。いいですか？ 肝心なことをきちんと話して行かないと、今度こそ、真面目くんに横からさらわれますよ？」

9 爆弾発言！？

真面目くん……もとい、松田くんのこととは野田さんにとって地雷だったようで、すごい形相で私を睨んで来た。

「いくら君でも、言っていていいことと悪いことがある。いい加減にしないと怒るぞ」

「どうぞ。怒ってくれてかまいませんよ。腹が立つなら殴れば？」

私が由利なら、自分に言ってくれないくせに、違うひとに言われたら腹立ちますよ。由利が営業成績で悩んでることをあなたが知らずに、真面目くんが知ってるのが何よりの証拠でしょ！？」

私を睨んだまま、野田さんは動かない。

もちろん、それにひるむ私でもない。

営業成績が落ちているのを野田さんに言わなかったのは、はつきり言って由利が悪い。同じ会社にいるんだもの。松田くんがそれを知ってるのも当然。それを彼にかぶせるのはお門違いとわかってい

る。
でも、どうしても、野田さんに覚悟を決めて欲しいんだ。どんな状況でも、彼女を幸せにするって。 どん

二度と、あんな由利は見たくないから。

彼に『野田さん』と言ってしまうって、熱にうなされながら泣いて、「ごめんね」とうわ言であやまつている姿を。

「君に相談するんじゃないかな。亮には悪いけど、帰る」

「どうぞ。私のことならご心配なく。彼が仕事終わるのここで待ってますから。マスター、いいでしょ？」

「……かまわないけど」

ポケットから財布を取り出した野田さんが、私の会計分までお金を置いて、何も言わずに店を出る。

肩をすくめてお金を手渡した私に、マスターが大きく息を吐き出した。

「いやいや。あの隼人くんにあそこまで言うなんて……。大したもんだね」

「そうですか？ 去年のクリスマス前はもったときついこと言ったんだけど」

驚いたままのマスターに笑って、携帯電話を操作する。亮さんのアドレスに、レインボーで待っている旨を送信すると、おいしそうなチャーハンが出て来た。

「成瀬さんの言う彼、って、隼人くんの後輩の沢村くん？」

「亮さんのこと、ご存じなんですか？」

「うん。隼人くんが何度か彼を連れて飲みに来てるからね。女の子を連れて来たのは、君が3人目」

由利と私の間には、あの『魔性の女』が入るんだっけ。

「しかし……どうするんだろうな、隼人くん。一度悩みだすと彼、長いから」

「由利はいつまでも待つ覚悟、決めてるみたいですけど。あんな中途半端なことで悩んでるひとに、彼女を託したくはないな」

「ま、そう言わないで。由利ちゃんを大切に想うからこそ、迷ってるんだよ」

あまり納得はできない。でも、マスターは私の知らないあのふたりを知っているんだろう。

あいまいにうなずいて、マスターのチャーハンをひとくち食べた。ふんわり焼かれた卵が、パラパラに炒めたご飯とすぐくマツチしている。薄味なのに、コシヨウの風味があとに引く。

「おいしい。これ、どうやって作るんですか？」

「それは企業秘密」

「ええ？ 教えて下さいよ。これ、作ってみたいな」

「ほう。料理するんだ」

「しますよ。私の部屋、リビングよりキッチンの方が大きいんだから」

「そりゃ沢村くんも大喜びだな。彼、前に料理出来る人が理想だっ

て言つてたし」

吹き出しそうになったチャーハンを慌てて飲み込んだ私は、思い切りむせる。

「おいおい。大丈夫かい？」

咳きこみ、胸を何度も叩く私に、マスターが水を入れたグラスを差し出してきた。

「いきなりヘンなこと、言わないで下さいよ」

「ヘンなこと？ 何言ってるんだ。つきあってるんだろ？」

マスターの言葉が、私の心をちくりと刺す。

「ええ、まあ……」

言葉を濁して、またチャーハンを食べだしてすぐ、小さな鐘の音がなった。

「いらつしゃい」

「あの……予約していた大村なんですが」

大村、という苗字に思わず振り返ると、そこには、あのデパ地下で忠行さんの隣にいた彼女が立っていた。

背中まで伸びたストレートの髪、ずいぶん幼く見える顔立ちには、愁いが見えて、彼が別れ話を持ちかけているのは本当なんだとわかる。

彼女が彼の名前を言ったということは……このままここにいと、鉢合わせしかねない。

「マスター、ごちそうさま」

残っているご飯を急いで食べて、カバンを持って立ち上がる。

「沢村くんが来るまで待つてるんじゃないのか？」

「急用思い出して。彼にはあとで電話しときますから」

忠行さんが来ないうちに帰ろうと、私は出口に急いだ。

ところが……。

私がドアノブに手をかける前に扉が開き、一番会いたくなかった

男が、姿を現す。

「……あずみ」

仕事帰りなのか、今日はグレーのスーツ姿。フチなしメガネに、前髪もきちんと整えた『営業スタイル』だ。

視線をそらし、外へ出た私を彼が追いかけて来る。

「待ってくれよ。あずみ」

「私に何の用？」

掴まれた手を振り払い、忠行さんを睨みつける。

「彼女待ってるわよ。気の強い私なんか相手にしないで戻ったら？」

「いや……その」

「望みもしない修羅場に巻き込まれるのはゴメンなの。もうすぐ彼も来るし」

亮さんのことを思い出したのか、忠行さんの表情がこわばる。

「あいつ、本当にあずみの彼氏なのか？」

「何？ 疑ってるの？」

「そういうわけじゃ、しかし……」

「忠行さん」

彼の背後から、不安そうな声がする。

「真衣……俺は、このひとが」

一度は振り返った忠行さんが、私に視線を送ってくる。

彼女に何を言いたいのか……ピンと来た。

「冗談じゃない。」

「申し訳ないけど、私、あなたをよりを戻すつもりは全くないから。その子のこと、ちゃんと大事にしてあげて」

「あずみ！」

「私、今の彼のこと愛してるの。それじゃ」

忠行さんの後ろで泣きそうな顔をしている真衣さんに頭を下げて、すぐそばにいたタクシーに乗り込む。

いつも行く駅ビルまでお願いし、シートに深く背中を沈めると、すぐに着信音が鳴った。

見るとまた、忠行さんの番号らしきものが表示されていたので、速攻で電源を落とし、カバンの中に携帯を放り込む。

あとで着信拒否にしておかないと、何度でもかかってきそうだと。それにしても……あんなにしつこいひとだったわけ。忠行さんって。

私に別れを告げるときは、幸司さんより淡々と、かつあっさりとして『例のセリフ』をつぶやいたくせに。

あんなに可愛くて、忠行さん一途って感じの彼女の、何が不満なんだか。

彼女が浮気疑うのも、愛すればこそなんじゃないかと思うけど。移りゆく窓の景色を見て、大きくため息をつく。

やめやめ。あんなひとのこと考えるのも、バカバカしい。

「お客さん、着きましたよ」

タクシーの運転手さんにお礼を言ってお金を渡し、お釣りはいいですと車を降りる。

時計を見ると、午後8時。

このまま家に帰る気にもならないし、少し遊んで行くか。

財布の中身を確認して、私はショッピングエリアの入り口へ歩いて行った。

「ありがとございました」

欲しかった洋服が安く売っていたので、何着か買ってしまった。重ね着もできるノースリーブのドレスに、カットソー。膝までのスリムパンツ。これで1万円以内で収まるんだから、夏物もそろそ

る店じまいみたいだ。

お給料日も近いし、いわゆるストレス発散。

お財布的にはちよつと痛いけれど、冷蔵庫にはまだ色々入っているから、どうにかなりそうだ。

お店を出た私は、休憩がてら近くのコーヒーストップへ入る。

いつものように携帯を取り出してディスプレイを覗くけど、待受画面が出て来ない。

電源を切っていたのを忘れていた。

ボタンを少し長く押してスイッチを入れた途端、また、着信音が鳴り響いた。

10 突然のキス

ディスプレイに表示されているのは、亮さんの名前。

しまった！ 連絡入れるの忘れてた。

「もしもし」

『あずみ？ 今どこにいるんだ！？』

「ごめんなさい。今、駅ビルの1階にあるコーヒーチェーン店にいる」

『わかった。すぐ行くから、絶対そこ動くなよ！』

いつになく大きな声に圧倒されて、うんとしか言えずに電話を切る。

でも。

亮さん……怒ってる、よね。きっと。

ここを動くな、って言われたけど、待ってられない。少しでも早くあやまらないと。

私は、飲みかけのコーヒを一気に飲んで立ち上がる。

荷物を持ち、所定の場所にカップを捨てて店を出る。

そして、いつも彼が車を停める駐車場に向かって歩き出した。

数分後、駅ビルの横にある駐車場に着いた。

何台か、こちらに向かってくるライトは見えるけど、どの車もがっしりとしたスポーツカーばかりで、彼が乗っている軽乗用車は来

ていない。

レインボーからここまで、タクシーでそんなにかかってないから、すぐ来ると思ったけど、週末のせいか、道路を見渡すといつも以上に車の流れが悪い。

さっきの亮さんの声……相当焦っているように聞こえた。

多分、迎えに来てもらった野田さんを怒らせたのもマスターから聞いているだろうし、何より忠行さんたちとばったり会った可能性が高い。

あのひと、私と亮さんのつきあいを疑ってかかってるから、それこそ何を言われたかが……心配。

昨日は私が先にブチ切れたからおとなの対応をした彼だけど、忠行さんは何てったって弁が立つ。

ひとの弱点なんかを巧みについてくるから、ケンカになってなきやいいけど。

ようやく動き出した車の列から、1台の軽乗用車が曲がってきた。停めてある車の間を、ゆっくりと近づいてくる。

ライトがまぶしくてよく見えないけど、前側が少し角ばったあの形……多分、亮さんの車だ。

思わず走り寄った私に気づいた車が、音を立てて止まった。

「あずみ！」

車から降りた亮さんが、大きな足音を立てて近づいて来た。

「ごめんなさい！」

亮さんの言葉をさえぎって、私は頭を下げた。沈黙が流れるのが怖くて、言わなきゃならないことを一気にまくし立てる。

「連絡遅れちゃってごめんなさい。それと、迎えに来てくれた野田さんも怒らせちゃったの。本当に、ごめん」

さらに深く頭を下げると、すぐに、亮さんの腕がほぼ直角に折った私の身体を起こした。

「俺、コーヒーシヨップから動くなって言わなかったか？」

怒ったような目で、亮さんが私を見下ろす。

やっぱり、待ってなきゃダメだったか。

「あ、あの、早くあやまらなきゃって、それしか、考えてなくて……。ごめんなさい」

また頭を下げた私の肩に手をかけたまま、亮さんは何も言わない。やっぱり……怒ってる。どうしよう。

彼氏とケンカをするときはだいたい、私の説教から始まって相手がブチ切れることが多かったから、『私自身が全面的に悪い状態』って初めてで……。これ以上、どう言ったらいいんだろう？

下を向いたまま、身動きの取れない私から荷物を取り上げた亮さんが、手を強く握って来た。

「……さ、乗って」

「怒って、ないの？」

思わず顔を上げた私を、亮さんが苦笑いしながら見つめて来た。

「そんな風に頭下げられたら、怒るに怒れないよ。今回は大目に見るけど、今度はきちんと居場所を連絡すること。レインボーであいつと鉢合わせしちゃって、正直、こうして会うまで気が気じゃなかったんだから。わかった？」

やっぱり、鉢合わせしちゃったんだ……。

「わかった。ごめんなさい。まさか、忠行さんがあの店使ってるとは思わなくて。何か、言われた？」

心配して訊ねた私から目をそらした亮さんが、なぜか、今度は小さく笑う。

「どうしたの？ ね、何言われたの？」

「あとで教えてあげる。それよりさ、隼人さん怒らせたって……どういうこと？」

車に乗り込んですぐ、私はレインボーでの一部始終を亮さんに教えた。

すると、駐車場の出口に向かってハンドルを切った彼がつぶやく。

「ああ……。それは隼人さんにとっての『地雷』だわ。確かに」

「やっぱり？」

「うん。そのことがあって由利さんとの絆が深まったのも事実だけど、まだ完全に許したわけじゃない。松田くんだけ？ その子と由利さんが一緒に会社で働いてることにヤキモチ妬いてるのも事実だしね。それ、つついちゃったんだ」

車を発進させた亮さんの神妙な横顔に、私はうなずく。

「どうしよう。これでまた野田さんと由利の間がおかしくなったら、私の責任だよな」

「そうはならないと思うけどな。隼人さんが一番恐れてるのは、由利さんを失うことだから」

「由利を、失うこと？」

繰り返した私に、亮さんがうなずいた。

「隼人さん、ずっと由利さんに恋してたから。4年前か。俺とレインボーのマスターがさんざんつついてやっと告白決意して。それでも真正面から言うのが怖いもんだから会社の女の子に協力頼んで、由利さんの気持ち確かめてから強行突破したんだから。かなり用意周到だよな」

それは私も、由利から聞いた。

会社のアイドルの受付嬢が好きだから橋渡しをしてくれ、と頼まれたはいいけど、それは真っ赤な嘘で。4年前のクリスマスイブの夜、いきなり部屋に来た野田さんに、勢いで告白したら着ぐるみはがされて……って展開。

「隼人さん、普段はひとをぐいぐい引っ張る力があるくせに、いざとなると臆病なんだよな。精神的にもろいところもあるし」

「それは由利も言ってた。だから私は彼をほっとけないんだ、って」

「だから、大丈夫。由利さんの方が一枚も二枚も上手だし」

亮さんが「大丈夫」と言ってくれると、なぜか本当に大丈夫なような気がしてくる。

「うん。大丈夫……だね」

「それよりさ、あいつ。大村くんは何かならんものかねえ」

私の家への最後の角でハンドルを切り、亮さんがため息混じりにつぶやく。

「ね、そういえば何言われたの？ あのひとつ、私たちの関係疑ってるよ。絶対」

「あずみはあいつに何て言ったの？」

「私？ 昨日と変わらないよ。よりを戻すつもりはない、彼女を大事にしる。それから……」

忠行さんに言った『最後のひとこと』を思い出した私の頬が、突然熱くなる。

「それから？」

「あ……っと。それだけ。うん、それだけそれだけ」

首を何度も縦に振り、私はその話題を終わらせようとする。

ところが、亮さんはいきなりハザードランプを点灯させて道路脇に車を止め、シートベルトを外した。さらに、ふたりを隔てていたベンチシートのひじ掛けを上げる。

「な、何してんの？」

「それから、何て言った？」

問いには答えず、にじり寄ってくるその顔にはまた、『悪魔の微笑み』が浮かんでいる。

「な、な、何でもないってないってば！」

シートベルトにかけた私の手を、亮さんがしっかりと握りしめた。動けない私の肩を抱かれてすぐ、耳元でささやかれる。

「嫌みたっぷり言われたんだ。『あの気の強いあずみを、よくそこまで手なずけましたね』って。ということは、君が何かを言ってくれた。俺、すぐくそれが知りたい。ね、何て言った？ あいつに」

何が『手なずけた』よ。私はペットじゃないっての。そ、そんなことより。

「離れてよ！ 売り言葉に買い言葉なんだから、知らなくていいって！」

「ふうん。やっぱり、何か言ったんだ」

につこり笑った亮さんの顔が、ぐっと寄ってくる。

動かせるほうの手を精いっぱい伸ばして、彼の動きを押しとどめようとするけど、当然、かなうわけがない。

「何するの！？ ちょっと！ こういうことは……」

柔らかい感触が私を包んで、その先の言葉は、続かなかった。

亮さんの唇が、ついばむように何度もふれて。

ふいに、深く押し当てられる。

「……………んっ」

直接入りこんで来る彼の吐息に、頭がぼおっとなつて。

押しのけようとしていた手から、だんだん力が抜けて行く。

それを察したのか、亮さんがシートベルトを外し、さらに身体を密着させた。

彼のぬくもりを直に感じ、全身が熱くなる。

どうして？ 私……。

戸惑う心とは裏腹に、自由になった私の手は、亮さんをしっかりと抱きしめていた。

11 うなずけなくて

舌先をかすめた新たな感触に、身体が小さく震える。

「う……んっ」

無意識に、鼻にかかった声が漏れた。

それと同時に、亮さんの舌が私の中に押し入ってくる。

反応を探るように、ゆっくり。それでも自在にうごめくやわらかな感触が、身体の奥深くに、何かをもたらす。

だめ、これ以上は。

頭ではわかっていても、全身にじんわり広がる甘い熱が、私の思考を奪っていく。

求めるままに、亮さんの首に腕を絡めて自分から身体を寄せると、かぶさってきた彼の重みと一緒に、シートが倒れた。

離れた唇が耳元をかすめ、うなじにふれる。

「りよう……さんっ」

喉元にわきあがる熱を吐き出すように、名前を呼ぶ。

すると突然、亮さんの動きが止まり、かかっていた重みから解放された。

目を開ける間もなく手を引っ張られて、そのまま、彼の腕に閉じ込められる。

上下している肩。

頬にふれる、早い鼓動。

耳に届く……熱い、吐息。

それだけで、亮さんが今、本気で私を抱こうとしていたことがわかる。

「こんなことは……しない約束じゃなかったの」

「そのはずだったんだけど、ね。もう……抑えられないや」

亮さんが、私を抱きしめる腕に力を込めた。

「……どうして？」

私の問いに答えずに、亮さんが真剣な眼差しを向けてきた。

とつさにそらした視線を合わされて、また、唇がふさがれる。

軽くあわせただけの口づけを終えてすぐ、亮さんがささやいてくる。

「あずみが、好きだ」

「亮さん……」

「あいつが君をあきらめるまでは、言わないようにしようって決めたのに。あずみがあんまりかわいいから、我慢、出来なくなっちゃった」

「そんな……よしてよ」

「どうして？」

亮さんが、私の顔をじっと覗き込んできた。あまりの近さに、思わず顔をそむける。

「私は、亮さんの言うような、かわいい女じゃないよ」

「またそれを言う。あのな」

「だって本当のことだもの。彼氏怒らせてふられてばかりの女の、どこがかわいいって言うの？ 亮さん、変わってる」

「じゃ、そんな変わってる男の、『本当の彼女』になりませんか？」
かすれた声が耳^じ朵をくすぐり、また、身体が小さく震える。

そんな私の耳元で小さく吹き出した亮さんの腕が、私をそっと包み込む。

「本当、かわいい。このままだとまた、我慢できなくなっちゃう……」

「……」

「……やめてよ」

「あずみ？」

「かわいいって言うの、やめて。何回も言ってるのに」

湧き上がるイライラを吐き出した私のすぐそばで、亮さんが大きなため息をついたのがわかった。

「何でそんなにつっぱる？ あずみ」

「つっぱってなんか、ない」

「つっぱってるよ。どうして本当の自分、否定しようとするの？」

本当の、自分？

優しい亮さんの言葉が、なぜか、とげのように突き刺さる。

「何？ それ。今の自分が、本当の自分だよ」

「違うね」

「違うって、何が!？」

亮さんが言っている意味がわからず、私はまた、声を荒げた。

今まで熱かった身体はすつと冷え、さつきとは違う速さの心臓の音が、私の耳を揺らし始める。

「確かに、あずみは強いと思う。どんなことでもはっきり自分の意見を言えるし、困ってるひとのために、危険にも飛びこもうとする。でも、それだけじゃない。強いだけじゃない君の素顔を、俺はもっと知りたい。だから」

亮さんの目に、今までと違う熱がこもった。

それに囚われて動けない私の頬に手を当てて、また、唇を重ねて来る。

最初から舌を絡めて、強く吸い上げられる。

まるで、私のすべてを飲み込もうとする激しさが……こわい。

「……やめて!」

一瞬、唇が離れたすきをついて、思い切り彼を突き飛ばした。

「あずみ……」

驚いたように目を見開いた彼に背を向けて、車から降りる。

「あずみ!」

亮さんの声が、私を呼んだ。でも、振り返れない。

全速力で部屋に戻った私は、鍵をロックしてすぐ、その場に座り込む。

……違う。

私は、かわいい女なんかじゃない。

今までつきあってきたひと、野田さんも、由利も、みんな言うもの。

『強いね』って。『独りでも大丈夫だよ』って。
なのに、どうして？

『あずみがかわいいから』 『強いだけじゃない君の素顔を、もっと知りたい』

どうして、そんなことを言うの？
私は……。

自分自身を抱きしめて、首を横に振り続けた。
脳裏にこびりついた亮さんの言葉を、肌に残るぬくもりを、自分から追い出さなくて、何度も……。

翌日。午後5時。

今日は会社の休みを利用して、亮さんが働くスポーツクラブの体験入会をする約束をしていたけど、もちろんキャンセルした。

朝起きて、キャンセルする旨をメールで送ってすぐ、携帯電話の電源を切ったまま過ごした。

コールセンターという仕事柄、不規則な休み。予定がなければ普段できない家事を色々と片づける。でも、昨日、亮さんから言われた数々の言葉が頭から離れなくて、今日は何も出来なかった。

私……どうしちゃったんだろう。

あのひとに会ってから、数日しか経っていないのに、おかしいよ。初めて会った日からペースに巻き込まれて。

好きなひとでもないのに、抱きしめられてもキスされても拒めなくて、危うく、身体まで許すところだった。

もしあのとき、亮さんの名前をつぶやかなかったら、きっと……。

ベッド脇に座ったままの私はまた、きつく目を閉じて膝を抱える。亮さんが、怖い。

このまま一緒にいたら、私が知らない……いや、知りたくもない自分を引きずり出されてしまいそう。

でも……。

あのひとことだけで、忠行さんが私をあきらめたとは思えないし、これから、どう亮さんと接して行けばいいんだろう？

何度自身に問いかけても、出せない答え。

いつそのこと、亮さんと別れて、独りで忠行さんに対峙するか。

それとも……。

私の脳裏にある考えがよぎったとき、突然、チャイムが鳴った。

誰……だろう？

私は思わず身構える。

もう一度、チャイムが鳴った。

キッチンに出た私は、ガス台の上にあるフライパンを手にして、ゆっくり玄関へ近づく。

すると……。

「あずみ、いないの？」

「由利？」

手にしたフライパンをガス台に戻してドアを開けると、小さなボストンバッグを提げたスーツ姿の由利が、こわばった顔で立っていた。

「ちよつ、どうしたの？」

「プチ家出。悪いけど泊めてね」

驚く私におかまいなしに上がり込んだ由利は、かばんをキッチン
の隅に置き、買って来たのか、コンビ二の弁当を2人分広げ始める。

「ちよつと由利！ いったいどうしたのよ！？」

「怒ったらお腹空いちゃったの。これ食べた話すから」

「野田さんと、大ゲンカ？」

食後のコーヒーを用意していた手を止めた私を見上げて、由利が
うなづく。

何でも今日、野田さんは会社を昼で早退し、出張だった由利が帰
ってくるのを待っていたんだそうだ。

「私の得意先の件数が減ってるのを松田くんから聞いたらしくて。
あいつが知ってて何で俺が知らないんだ？ って。彼とのこと、未
だに疑ってるみたいなの」

……あちゃ。やっぱりこじれちゃったか。

「ごめん、由利」

「何であんたがあやまるのよ？」

私は、昨日の一件を由利に話す。すると彼女が大きな声で笑い出
した。

「それですか。何かおかしいと思ったのよね。今まではそんなこと言
ってなかったのにいきなりだもの」

「で、由利は何て？」

「冗談じゃないわよって言ってやった。彼だってちゃんと気持ちの
整理はつけてくれてる。そう信じなきゃ、一緒に仕事なんかできな
いもの。でも……」

そこからさらに野田さんは、昨日私に言った『本社に戻らない』
一件を由利にぶちまけたそうだ。しかも、かなり感情的に。

由利のことになると、どうやら野田さんはブレーキがきかなくな
るらしい。

去年、彼女と別れて私にさんざん愚痴ったときもそうだった。送
ってもらったとき、松田さんと由利が抱きあってるのを見て激高し
た彼に言ったことがある。『自業自得だ』って。あんたがしっか
り由利の心をつかまえてないから、そうなるんだって。

「それで？」

「あまりにも向こうの言い分が勝手だから、その……」

突然、由利が恥ずかしそうにうつむいた。

「どうしたのよ？」

「……笑わない、って約束してくれる？」

「はあ？ 何それ」

「絶対対に笑わないでよ。約束だからね！」

つかみかからんとする勢いでにじり寄って来た由利に圧倒された
私は、ただ、うなづくことしかできなかった。

11 うなずけなくて（後書き）

突然失礼します。作者の笠原です。

本日の「活動報告」にて、web拍手にいただいたコメントへのお返事をさせていただきました。

本当にありがとうございます！ ぜひ、ご確認ください。

12 『恋人』、解消

勢いよく私に同意を求めたものの、由利はまた、しばらく黙り込んだまま。とりあえず彼女の前にコーヒーを置き、話したのを待つ。

「……私、実は、婚姻届を持ってたのね。もちろん、無記入の。ほら、実際に書くときに書き損じたら困るしさ。その、離れてても、これがあれば大丈夫だって。まあ、お守り代わりに」

ようやく、頬を染めて、しどろもどろに由利が言葉を紡ぎ始めた。「うん。それで？」

先を促した私を一瞬見て、由利がまた恥ずかしそうにうつむく。手を何度も組みかえて、あちこちに視線を移した彼女が、大きく息を吐いた。

「その婚姻届に、自分のサインと印鑑だけ押して、彼に突きつけたの。『私はいつまでも待つ覚悟はできてる。あとは、あなたが決めて』って……」

口に含んだコーヒーを思わず吹き出しそうになり、思わずむせてしまう。

「あんた！ それって『逆プロポーズ』じゃ」

「違うわよ。プロポーズはとくにされてるもん」

肩をすくめて、また、由利がうつむいた。

「いや、まあ。確かにそうだけど……」

……恐れ入った。よりを戻して以来、どっちかと言うと野田さんから三步下がってついて行ってるようなイメージしかなかったのに、こんな大胆な行動を取るとは。

「ね、どうしよう？ 隼人が『やっぱり結婚できない』って言ったら……」

「何を今さら。ここまで来たら、あんたも腹くるしかないでしょう！？」

「でも、私もうすぐ三十路よ。今さら、隼人以外のひとなんて考えられないし」

「真面目くんがいるじゃん。彼、彼女いないんだって？ 由利のこ
と待ってるかもよ」

「からかわないでよ！ もう」

おどけた口調で言うと、テーブルを叩いた由利が私に背を向けた。
しばらくして、彼女の肩が震え出す。

「由利……」

「どうしよう……私」

年上のくせに、こういうとこ、すごく可愛いんだ。由利って。

「大丈夫。野田さんには、少し時間が必要なだけだよ」

由利の前にひざまずき、彼女の手を強く握る。

「だと、いいんだけど……」

「婚姻届突きつけたあんたが、そんな弱気でどうすんの？ ……ね
っ」

涙に濡れた目で、由利がうなずいた。するとまたチャイムが鳴る。

「……誰だろう？ はあい！」

「由利、出なくていいって」

照れ隠しなのか、追いかける間もなく、由利は私の手をほどいて
玄関へと出る。

忠行さんだったら……どうしよう？

由利に手荒なまねはしなないと思いたいけど、最近の彼、何するか
わからないし。

助けを呼んだって、両隣の部屋は空いてるから、期待できない。
リビングに引っ込んだ私は、身を固くする。

ところが。

「何引っ込んでんの？ あずみ。彼が来てくれたわよ」

今度は満面の笑みで、由利がリビングへ入ってきた。

その後ろから、ひょっこりと亮さんが顔を覗かせる。

いつもと違う、少し緊張したような面もちをした彼を見るだけで、

私の胸が強く締めつけられる。

「由利さん、すみません。ふたりきりにしてもらっていいですか？」

「もちろん。いいわよ。私近くのコンビニに行ってくるから、どうぞごゆっくり」

何も知らない由利は、亮さんの言葉に目を輝かせてうなずくと、そのまま部屋を出て行った。

亮さんがゆっくり、私に近づく。

「……昨日は、ごめん」

ベッドに腰をかけ、うつむいたままの私の頭上から、声が聞こえる。

「俺、自分の気持ちを伝えるのに精いっぱい、あずみの気持ち、考えてあげられなかった」

言葉どころか、身体を動かすことすら出来ずにいる私の前で、亮さんがしゃがみこむ。

「俺……『あずみの恋人役』から降りるよ」

いつにない真剣な声色で、亮さんが言った。

私の背中に、突然冷たいものが下りる。

……どうして？

「これから先も一緒にいたら、きっと今まで以上に、あずみを傷つける。だから」

言葉を切った亮さんが、私の手を包み込む。

「……ごめんな。あいつが早く、君をあきらめてくれるの願ってるから」

思わず、亮さんの顔を見る。

だけど彼は私から目をそらし、立ち上がった。

……待って。

言葉が、出ない。

私のこと、好きだって言っただじゃないよ。
強いだけじゃない、私の素顔を見たいって言って、キスしてくれ
たじゃない。

どうして？ 亮さん。

あなたも、今までの彼氏と同じなの？

ドアの閉まる音が耳に届いて、私は我に返った。
何考えてた？ 私。これで……いいんじゃない。
もう、亮さんのペースに巻き込まれなくてすむ。
好きでもない彼に抱きしめられることも、キスされることもない。
妙にドキドキして、我を忘れることだってないんだから。

なのに。

むなしさだけが、募る。

「ちょっと！ あずみ！」

血相を変えて、由利がリビングに飛び込んできた。

「あんた、沢村くんは何言っただのよ！」

「何、って……」

「コンビニに行く道すがら、車に乗った彼に呼びとめられて『恋人
役降りしましたから』って、どういふことよ」

「その、まんまだよ。私から降りてくれとは言っていない」

鼻の奥がツンとなって、私は由利から背を向ける。

「じゃ、彼が言いだしたっての？ 何で」

「私に愛想尽かしたんじゃない？ どうせ、気の強い、かわいくも

ない女だし」

今度は、目の前がぼやけてくる。

「……あずみ？」

声が震えたのがわかったのか、由利が私の前に回り込んで来た。

「何でもないったら！」

由利から逃げるように横になり、夏がけ用の布団を頭までかぶる。目を閉じたら、涙があふれ出た。

何で泣いてるの？ 私。

ふられるのは、いつものこと。

ましてや、亮さんとは出会ってたったの3日。

ただ『便宜上の恋人』ってだけ。

泣くことなんか、ないよ。

また、合コンが何かで、忠行さんからの防波堤になってくれる彼氏を、見つければいい。

それだけ……なのに。

「あずみ。あんたもしかして、沢村くんのこと……」

「……違う。好きじゃない！」

涙まじりの声で叫んで、何度も首を振る。

「じゃ、何で泣いてるの？ どうして、私の顔見て『違う』って言わないのよ！？」

私の肩を布の上から揺さぶる由利の手を、布団の中で払いのける。

「あずみ……私は、あんたの何なの？」

由利の声が、かすかに震えた。

「私、あずみと知り合ってから何でも話して来た。去年、隼人と別れたときは情けないところもいっぱい見せて。でも、あんたは何も見せてくれない。それで、親友って言える？」

由利の問いが、私の心を鋭く突く。

私だって、何でも話して来たよ？

彼氏と別ればその理由を。つきあうことになればどこに惹かれたかを。ケンカしたら、その、経緯も……。

それだけじゃ、ダメなの？

いつもなら、こんなこと言われたらすぐ反論するのに、疑問符が頭の中をぐるぐる回るだけで、なぜか、何も言えない。そんな私に、彼女はさらにたたみかけてくる。

「あんたは彼氏と別れるときもつきあうときも、いつも事後報告で悩んでたって苦しんでたって、何も話してくれない。今だってそうよ。沢村さんに別れを告げられて苦しいんでしょう？ つらいんでしょう？ なのに、何でそれを……何で、弱いところを見せてくれないのよ！？」

いつも、『あずみは強いね。私も頑張らなきゃ』って言うてくれたのに。

何で由利まで、いきなりそんなこと言いだすの？

『強いだけじゃない、私の素顔』って？

『私の弱いところ』って？

身動きすらとれない私の背中で、クローゼットを開ける音がした。布がすれる音がして、由利が、キッチンとリビングを何度か往復しているのがわかる。

「やっぱり、何も言うてくれないんだね、あずみ。……寂しいよ」

クローゼットが閉まる音がしてすぐ、由利の言葉が降って来た。

「おやすみ」

今度は、キッチンへのドアが閉じられる。

まるで、今あるすべてから拒絶されたような感覚が私を襲い、私の目から、また、涙がこぼれ落ちた。

12 『恋人』、解消（後書き）

いつもありがとうございます。作者の笠原です。

先日頂きました活動報告、ならびにweb拍手コメントへのお返事は、夕方以降にさせていただきます。

どうぞよろしくお願いいたします。たくさんの声を、ありがとうございます！

13 久しぶりの合コン

「あずみ、起きて」

薄い黄色のルームウェアを着た由利の手が、私を優しく揺り動かす。

目を開けると、カーテンの隙間から朝日が入り込んでいた。いつの間にか眠っていたらしい。

「今日、仕事？」

「……うん」

「朝ご飯作ってるから、支度して」

「ありがとう」

由利の顔を見られないままキッチンを通り過ぎ、ユニットバスの脇にある鏡の前に立つ。

泣きながら眠ったせい、まぶたは腫れぼったいし目は真っ赤。おまけに肌もつっぱってる。

今何時なのかは知らないけど、出勤できるような顔じゃない。

冷たい水で顔を洗い、化粧水と保湿ジェルをいつもの倍つけて、冷たいタオルを用意する。

それを目に当て、家具にぶつからないように注意しながらキッチンに戻ると、甘い香りが辺りにただよっていた。

「今、何時？」

「まだ7時過ぎよ。フレンチトーストとオムレツでいい？」

「ありがとう。充分だよ」

それ以上は何もしやべらずに、私はタオルの下で何度もまばたきを繰り返す。

「私今日休みだから、洗濯とかしといてあげる。洗濯物、あつたら出しといて」

「うん」

表だってケンカをしたわけではないのに、何を話したらいいのか。

お互い、何かをさぐり合っているのが、続く沈黙の長さでわかる。
私たちは必要最低限のことしか話さないまま、食卓に並んだご飯を淡々と食べた。

歯磨きをしてすぐリビングに引っ込み、化粧をするけどノリは最悪。目はだいぶ赤みが取れたけど、まぶたはまだ腫れたままだ。

白のTシャツの上に水色のカーディガンをはおり、黒のGパンをはいてから、由利の言葉に甘えて洗濯物を出してキッチンへ出る。

「じゃ、行ってくる」

「うん。気をつけてね」

スニーカーを履いて表へ出ると、まだまだ蒸した空気が私を包む。空はものすごく青くて、太陽が辺りをまぶしく照らしているのに、私の心は一向に晴れない。

通り慣れた道を歩く間に思い起こすのは、亮さんの昨日の言葉ばかり。

『俺……『あずみの恋人役』から降りるよ』

『これから先も一緒にいたら、きつと今まで以上に、あずみを傷つける』

『……ごめんな。あいつが早く、君をあきらめてくれるの願ってるから』

信号待ちをしている私の目から、また、涙があふれ出る。

どうして、涙が出るの？

あんなに熱っぽく私を求めて来たくせに、拒絶したらこれだもの。しょせん、私をかわいいだの、忠行さんよりわかってるだの、傷つけたくないだの大口叩いてたって、亮さんも今までのひとと変わらなかった、ってこと。考える必要なんてない、のに……。

一生懸命そう言い聞かせても、打ち消せない。

抱きしめられたときの、安心感。
キスされたときの、ときめき。
そして……。

信号が青になっても、歩き出せない。

周りのひとが視線を送っているとわかっていても、私は、立ち尽くしたままあふれる涙を止められなかった……。

上司に遅刻連絡をし、地下鉄の駅のトイレで気持ちを落ち着かせて1時間遅れで出社した私は、とにかく仕事に集中することだけを心掛けた。

ほんのささいなミスで信頼を失くすのが、声だけの仕事。
声自体は決して本調子ではなかったけど、応対するときは口角をあげて、なるべく明るいい口調で。

聞き取りミス、発注間違いはしないように繰り返して。

「どうしたんですか？ 成瀬さん。今日、いつもと違う」

隣に座る後輩の山田さんが何かにつけて声をかけてくるけど、適当にいなして、お客様の声に耳を傾ける。

それだけで、あつという間に終業時間を迎えた。

疲れ切って更衣室のベンチで座り込む私に、彼女がまた声をかけてくる。

「成瀬さん。明日、何か予定ありますか？」

「別に。何もないけど」

「近くの外資系の会社のひとと合コンやるんですけど、人数足りなくて。成瀬さん、出てもらえませんか？」

合コン、か。何かかったるいけど、早いところ『彼氏のふり』してくれるひと探さなきゃならないし……どうしよう。

「成瀬さんいると、その場が盛り上がるって評判ですもの。お願い

します」

甘ったるい声で、しゃがみこんだ山田さんが私を見上げて来る。
私……そんな評判たってたんだ。知らなかった。

「明日の体調次第でいい？　あまり調子よくないんだ」

そう答えると彼女は、自分のロッカーから栄養ドリンクをどつさり持ってきた。

「はい！　これ飲んで元気出して。明日、待ってますからね」

有無を言わせない迫力で「お疲れさまでした」と愛想をふりまき、更衣室から出て行く。

「あの子って本当、人生楽しんでますよね」

山田さんの同期で、彼氏いない歴が自分の年齢分との噂が立つ斎藤由美さんが、眼鏡を直してロッカーの扉を閉める。

「斎藤さんも、行くの？」

「まさか。あんな子と一緒に飲むなんて、耐えられませんから。お先に失礼します」

「お疲れ様」

そういや、同期会にも出席したことがないって、山田さんがぼやいてたっけ。

あの子から見たら、合コンで彼氏見つけてた私も、彼女と同類なんだろうな。

なぜか、深いため息が漏れる。

亮さんからも……そんな風に見られてたんだろうか。私。

だから、あんな風に私を誘って、からかったただけなのかな……。また、視界がぼやけてきた。

いけないいけない。もう、彼のことを考えるのはやめにしなきゃ。心の整理を早くつけて、次に進む。これが私。

脳裏に浮かんでは消える亮さんの面影を消すように立ち上がる。

山田さんからもらったドリンクをバッグにしまって、私は更衣室を後にした。

「あ、成瀬さん。来てくれたんですね！」

次の日、指定された時間に会場へ行くと、山田さんが満面の笑みで近づいて来た。

今日の彼女はいつも以上に気合いの入ったギャルメイク。髪の毛も今流行りの「盛り髪」で、ずいぶんと露出度の高いワンピースを着ている。

一方の私は、髪の毛こそカラーで巻いて立体感を出したけれど、黒のキャミソールの上に白のカーディガン、そして、バーゲンで買ったひざ丈のスリムパンツとラフなものだ。

とにかく、今回はあくまでも『彼氏のふりをして、忠行さんをお願い負かしてくれるひと』を探すだけだから、あまり期待しないでおこう。

人数はだいたいそろったようで、思い思いのドリンクを注文し、早速山田さんが乾杯の音頭を取る。

ひとりひとり自己紹介をはじめ、すぐ、私の番が回ってくる。

「成瀬あずみといいます。よろしく」

名前を言って頭を下げると、なぜか、一部の男性陣が色めきだした。

そうなると面白くないのが、女性陣。

私を嬉々として誘ってきた山田さんの目も、心なしか陰しくなる。それでもフリーで話したせば、みんなそれぞれ自分の好みの男性にアピールしてくんだから、大したもんだ。

「ずいぶん冷めた目で見てるね。楽しんでます？」

私の隣に座る、髪の毛をヘアワックスできっちり固めた男性がグラスを上げる。

「まあ、そこそこ。あなたは？」

「僕もそれなりに。お仕事、何してるんです？」

「通販会社のコールセンター。あの子の同僚」

一番人気の男性に積極的に話しかけてる山田さんに視線を送って、ビールを口にする。

「ああ。あの子、この辺の合コン全部仕切ってますもんね」

「へえ、山田さんのこと知ってるんだ？」

「もちろん。あなたのことも存じてますよ、成瀬さん」

「は？」

何でこのひとが私を知ってるんだろう？ そんな目をしていたのか、隣の男性は私にっこり微笑んだ。

「去年の年末、まだウチにいた野田を、会社からさらって行ったでしょう？」

「ああ。由利……西村さんの会社の方？」

彼がうなずく。僕はその場にいませんでしたけどね、との前置きがあつて、

「ええ。友のために一肌脱いだって感じ？ すったもんだあったらしいけど、あのあと、野田が営業フロアで西村と婚約宣言しましたからね」

「野田さんに聞きましたよ。何でも『伝説の女』扱いされてるらしいじゃないですか、私」

「そんなあなたとお知り合いになれるなんて光栄だな。どうですか場所移しませんか？」

さわやかな感じだし、野田さんと由利の同僚だから、ヘンなことはしてこないだろう。

そう思った私は、指で小さくOKサインを作って、ビールを飲み干した。

14 かなわぬ願い（前書き）

今回の話、食事中もしくは前後の方はご覧いただく際お気をつけ下さい。

14 かなわぬ願い

久しぶりの合コンで知り合った男性　森脇悟（かいり）さんに連れられて来たのは、ずいぶんと落ち着いた感じのバーだった。

間接照明が均等に並べられているだけの店内はかなり暗く、早い時間のせいかな、まだ、お客さんはひとりも入っていない。

彼はここの常連のようで、背の高い、ヒョロとした感じのマスターが、微笑んで私たちを迎えてくれる。

「おや、いいひとかい？」

「いいひとになれるかどうかはこれからさ、ね」

片目を軽く閉じて振り返る彼に曖昧に笑って、私は、通された力ウンター奥の席へ座る。

私はカシスソーダ、彼はテキーラベースのブルー・マルガリータを注文して、乾杯する。

彼に勧められるまま杯を重ねた私はかなり酔いが回ったようで、いつしか饒舌になってしまっていた。

「へえ。しつこい元カレね」

「そ。二股かけて私をふったくせに、いきなりより戻そうだもの。信じられないったらありやしない」

残ったカシスソーダを一気に飲み干すと、マスターがすぐ、お代わりを作ってくれた。

「で、彼氏のふりをしてそいつを追っ払ってくれる奴を探してる、と」

グラスに口をつけた森脇さんに向かって、私はうなずく。

「そういう奴、今までいなかったの？」

「ひとり、いたんですけどね。あっさり逃げられちゃった」

脳裏に浮かんだ亮さんの面影を追いつつ、煽るように飲み干す。

「ちょっと、飲みすぎじゃないのかい？」

グラスを差し出した私に、マスターが心配そうな顔を向けて来る。
「いいのいいの。こういうときはパツと飲まないと。ね、あずみさん」

つきあってくれたのか、彼も、ブルー・マルガリータを一気に飲み干した。

ビールとカクテルをちゃんぼんしたせいか、顔が熱い。

頭もだんだんぼおっとなつてきて、つい、疑問が口をついで出た。
「なんで……逃げられちゃったのかなあ？」

「は？」

森脇さんが、私の顔を覗きこんで来る。

「私、気が強いせいか彼氏にふられてばかりだったの、今まで。でも、そのひとだけは私を『かわいい』って、『好きだ』って言うてくれた。でも……」

少し拒絶しただけで、亮さんは……。

『傷つけたくない』 その言葉を残して、私から去って行った。

また、鼻の奥がツンとなって、ただでさえ少し揺れてる視界がぼやけてく。

「そいつと、本当につきあってたわけじゃないんだろ？」

鼻をすすって、私は小さくうなずく。

「だったら、忘れればいい」

私の右側にいる彼が手を伸ばして、私の指先を握りしめた。

その手を強く引っぱって、強引に肩を抱き寄せる。

「……何、を」

「君が何を行ったかはわからないけど、ちょっとしたことでおじけづくような奴に、恋人のふりなんて無理だよ。俺なら、完璧な『恋人』演じられると思うけど？」

耳元でささやかれ、背筋に冷たいものが走った私は、思わずマスターの方を見た。

だけど彼は見て見ぬふり。何事もなかったかのように黙々と手を動かしてる。

「離して……っ！」

「『恋人』を演じるなら、まずはお互いのことをよく知らなきゃね」
肩を抱いているのと逆の手が、私の頬にふれた。

一瞬で何をされるかわかった私は、自由になった手で彼のグラスを持ち、中のものを勢いよく顔にぶちまける。

「悟くん！」

マスターの叫び声が、誰もいない店内に響いた。

彼の力が抜けたのを見計らい、無理やり椅子から降りた私は、ありったけの怒りを込めて叫ぶ。

「好きでもない男に許すほど……、私は安い女じゃないわよ！」

目元を押さえてうめく彼を残し、勢いのまま扉を開けて、走り出す。

身体全体を通り抜ける風。耳に聞こえる、車のクラクションの音。

あの暗い空間から解放された安心感からか、急に力が抜けて、足下がふらつく。

息も、苦しくなってきた。

身体の中のもの逆流する嫌悪感に耐えられなくなった私は、その場にうずくまり、今まで飲んだものをすべてもどしてしまう。

……助けて。

心の中で、つぶやく。

もう、二度とそばにいてくれない、あのひとに向かって。

ほかのひとに『恋人のふり』をしてもらうなんて、無理。

かといって、ひとりで忠行さんに対抗できるすべなんて、残っていない。

「大丈夫ですか？」

誰かが、声をかけて来る。

背中をさすってくれる、大きな手。

肩に回された腕が、なぜか、すごく肌になじんで来る。

……もしかして。

かすかな期待をこめて顔を上げる。ところが。

目の前が急に真っ白になった私は、そのまま意識を失った。

冷たい何かがおでこに当たったのを感じて、ゆっくりと目を開ける。

薄汚れた灰色の天井。カビの匂いが少し、鼻につく。

そして……ものすごく幼い顔立ちをした女の子が、心配そうに私を覗き込んでいた。

「大丈夫、ですか？」

肩まで伸びた黒い髪をふたつに結わえた彼女が、私のおでこに手を当てる。

「よかった。熱は下がったみたいですね」

「ここ、は……？」

「近くの飲み屋さんの裏口です。無理やり頼んで寝かせてもらいました」

鈴のようなかわいい声が、私の耳に優しくなじむ。

「ごめんなさい。すっかり……迷惑かけちゃって」

「ダメです。まだ寝てないと。顔色良くないですし」

起き上がろうとした私を無理やり寝かせるとすぐに、ドアをノックする音が聞こえた。

「まこちゃん。気がついた？」

顔を覗かせた男性を見て、私は思わずつぶやく。

「真面目……くん？」

「どうも、ご無沙汰してます。成瀬さん」

「助けて、くれたの……」

「先に、まこちゃん……いえ、彼女が見かけたんです。前に、ふらついているひとがいるって。それで駆け寄ったら、突然倒れたから」

真面目くん……いや、松田くんの隣で、まこちゃんと呼ばれた少女が頭を下げる。

「どうもありがとうございます。この子、妹さん？」

「違いますよ！ 彼女、こう見えても大学4年生です」

「は？」

「高橋真琴といいます。よろしくお願いします」

照れたように、真琴さんが深々とおじぎをする。

「成瀬、です。どうも」

驚いてただ見上げるだけの私に微笑んだ彼女が、松田くんに向き直った。

「じゃ、松田さん。私帰ります」

「ひとりじゃ危ないよ。送ってくって」

「いいんです。すぐそこで、タクシー拾いますから」

慌てた様子で止めようとした彼の手を押し戻し、真琴さんが私に頭を下げる。

「それじゃ、お大事に」

心なしか寂しそうな笑顔を残し、彼女は部屋を出て行った。

「デートの邪魔、しちゃったね。ごめん」

「そ、そんなんじゃありませんって」

かすかに頬を染めて、胸の前で一生懸命手を振る松田くんを見て、私は安心した。

もう、彼の中で『由利とのこと』は、過去になっているんだと感じたから。

去年のクリスマス前、のぼせあがって由利に自分の想いをぶつけ

ていた彼はもう、いない。

由利の言うように、きつと、自分でちゃんとけじめをつけて、真琴さんを想っているんだろうから。

「そんなに、見ないで下さいよ。恥ずかしいです」

「つきあってるわけじゃないの？ 『まこちゃん』と」

「まだです！ 知りあって、まだ、1か月も経ってないし、その…」

「何言ってるの。時間なんて」

関係ないよ そう言いかけて、口をつぐむ。

亮さんと出会って3日で身体を許しそうになった自分が、言えた義理じゃないんだ。

「どうしました？ また、具合悪いです？」

「何でもない。早く告白しなよ。じゃないと真琴さん、他の男にとられちゃうよ」

「な、成瀬さん！」

頬を真っ赤にして松田くんが叫んだあと、廊下が少し騒がしくなった。

ノックもせずに、ドアが開く。

「あずみ！」

私を呼ぶ声に身体を起こすと、松田くんの肩越しに、血相を変えた由利が立っているのが見えた。

15 素直になって（前書き）

長らく更新が滞ってしまい、申し訳ありませんでした。
今回のお話も、食事中の方、またはその前後の方は、ご覧頂く際お
気をつけ下さい。

15 素直になって

「由利……」

思わずつぶやいた私に一瞬視線を送った由利は、松田くんに深く頭を下げる。

「どうもありがとう。松田くん」

「いえ。僕の知り合いがたまたまふらついてる成瀬さんを見かけたんで」

「あずみ、一体どうしたの？」

松田くんにならずいた由利が、今度は私に問いかける。

でも、私は答えられない。

合コンに行ったことも、由利たちの同僚に手を出されそうになったことも、今は言いたくなかった。

「ちよつと！」

「西村先輩。とりあえず、ここ出ましょう。成瀬さんを早く休ませてあげないと」

松田くんが、声を荒げた由利を慌てて止める。

納得のいかない表情でうなづく彼女の横で、松田くんがスーツを脱いで私に羽織らせる。

由利に手を借り、肩を軽く叩いた彼の背中におぶされると、いとも簡単に身体が宙に浮いた。

松田くんと由利が店のひとに丁寧にお礼を言って、外へ出る。

蒸した空気が身体を包むけれど、私はなぜか、急に寒さに襲われた。

「成瀬さん、大丈夫ですか？ 病院行きますか？」

「……ううん、大丈夫」

これ以上、ひとに会いたくない。こうなってしまった理由を話すのは、イヤ。話すくらいなら、具合の悪いのをガマンしている方がまし。

「本当に大丈夫なの？」

由利の問いに小さくうなずくと、松田くんがタクシーを停めてくれた。

由利と私が後部座席。松田くんは運転手さんに頼みこんで助手席に乗ってくれた。

「すみません。このひと、具合悪いんでゆっくり走っていただけます？」

「わかりました。お客さん、横になったらいいですよ」

彼の言葉に納得したのか、運転手さんがミラー越しに私を見た。

「すみません」

運転手さんの好意に甘えて、由利の膝枕で横になる。

頬にかかった髪を優しく梳いてくれる由利の手のぬくもりに、私はすごく安心して、目を閉じた。

気がついたら、朝だった。

タクシーの中で眠ってしまったから、どうやって部屋まで帰って来てベッドに入ったのか、まったく覚えていない。

でも、たくさん汗をかいたらしく、着ているものが湿っぽい。

「おはよう、あずみ」

スーツ姿の由利が、トレイを持って入って来た。

勝手知ったるもので、小さなテーブルをクローゼットから出して、その上にトレイを置く。

具がいっぱい入ったおじや。ほうれん草のおひたしにスポーツドリンク。それと、市販の解熱剤。

「真面目くん、は？」

どうにか起き上がった私は、由利に訊ねる。

「あんたをここまで連れて来て、すぐ帰ったわよ」

「そう……。彼に、悪いことしちゃったな」

帰り際、寂しそうな笑顔を浮かべて頭を下げた真琴さんの姿が、浮かんでは消える。

「ちゃんと彼にはお礼言つとくから。それはそうと、10時からの商談が終わったなら、早退して戻ってくるわね。まだ熱下がないみたいだから、病院行こう。ほら、去年の末に呼んでもらった、絵理子先生のところ」

「いいよ、1日寝てれば下がるから」

「馬鹿言うんじゃないの。昨日、どれだけ上がったと思ってるの？ 何度先生に来てもらおうと思ったか」

だから、こんなに汗をかいていたのか。

「……ごめん。もしかして、寝てないんじゃないの？」

「平気よ。仕事忙しいときはしょっちゅうだもの。それより、ご飯ちゃんと食べて薬飲むのよ」

「わかった。ありがと」

素直にうなずくと、由利が笑顔で私の頭を軽く叩いた。

「着替えもそこに出しといたからね。行ってきます」

「行つてらっしゃい」

由利が、家の鍵をぶらぶらさせて、キッチンへの扉を閉める。

彼女が作ってくれたおじやを一口食べる、私が教えたものだけど、味は少し濃いめ。多分、野田さんの好みなんだろうな。

時間をかけて食べ終わる頃には、また、汗をたっぷりかいて、服がまた湿っぽくなっていた。

胃もずっしり重く、胸やけがひどい。

用意してくれた解熱剤を胃薬に変えて飲み、どうにか着替えを済ませて横になる。

消化がよくなるように右側を下にして横になる私の脳裏に、あいつの言葉がよみがえる。

『「恋人」を演じるなら、まずはお互いのことをよく知らなきゃね』
互いのことをよく知る、イコール、関係を持つことだとも思っ
てるんだろうか。
ふざけんじゃないわよ。

『君が何を言ったかはわからないけど、ちょっとのことでおじけづ
くような奴に、恋人のふりなんて無理だよ。俺なら、完璧な「恋人」
演じられると思うけど？』

あんたみたいな奴に、亮さんの何がわかるの？
あのひとは、忠行さんに言ってくれたもの。
『今のあなたよりは、あずみのことをわかつてる』って。

だったら、どうして？
どうして私から、離れて行っちゃったの？
あなたが思ってた『本当の自分』って何？
それすらも、教えてくれないで。

考えれば考えるほどムカついて、悲しくて、胃が強く痛み出した。
かわいた咳を何度もして、こみ上げて来るものを必死に飲み込む
けれど、こらえられない。

どうにか立ち上がり、トイレに駆け込む。
何度も押し寄せる嫌悪感を、涙とともに吐き出した。
トイレから出て口をゆすいだあと、意識がもうろうとしたままそ
の場に座り込んだ。

寒気が止まらず、身体に力が入らない。
10時から商談がある、そう言って出勤した由利には申し訳ない
けれど、もう、耐えられない。
すぐそばにあったカバンから携帯を取り出し、彼女に電話をかけ

る。

何度も繰り返されたコール音が、ようやく切れた。
安心したのか、急に目の前が真っ白になる。

由利が何かをしゃべっているようだけど、聞こえない。

「さむいの、由利。たすけて……」

それだけ言つて、電話が手から滑り落ちたのがわかったけれど、
もう、拾う気力もない。

そのまま私は、床の上に倒れ込んだ。

どのくらい、時間が経つたのだろう。

もつろつとする頭で、その場に寝転んだまま寒さに震えていると、
急に身体が浮いた。

頬を叩く手が、私を支えてくれる腕が、しっくりなじんで来る。

「あずみ、しっかりしろ！」

この、声は……。

「りょう……さん？」

目を開けられない私の手を握りしめる、大きな手。

「いったいどうしたんだ？」

すぐそばで聞こえる亮さんの声に、また、涙がどつとあふれた。

これは夢？ それとも、現実？

はつきりしない状態で考えたところで、わかるはずもない。

でも……もし、これが現実なら。いや、夢でもいい。

今なら、きつと、亮さんに訊ける。どうして、私から離れていつ
たのかを。

「亮さん、教えて」

「何を？」

「どうして、『恋人役』、降りたの？ 私が、亮さんを、拒んだから？」

とめどなくこぼれる涙をそっとぬぐって、亮さんが、私を抱く腕に力を込めて来た。

「バカ。そうじゃないよ。あずみを傷つけないからって、言うたろ？」

「だったら……そばにいて。もう、ひとりじゃ頑張れない」

「あずみ」

「亮さん以外のひとなんて、探せない。探したくも、ない」

亮さんと離れて、思い知らされたの。

あなた以外のひとに「性の対象」として触られることが、どれほどイヤなものか。

私をそんなにしたのは、あなたなのに。

「忠行さんが、私を、あきらめるまでで、いいから。『便宜上』でも構わない。だから、もう一度、恋人になって……お願い」

しゃくり上げながら手を伸ばして、亮さんの首にすがりついた。

「俺で、いいの？」

耳元で訊いてくる彼に、何度もうなずく。

遠くで、チャイムが鳴った。

身体が宙に浮いて、しばらくすると、やわらかい何かが私の背中にふれた。

「あずみ、ちょっと待ってて」

離れて行こうとする亮さんの手を、握りしめる。

「行かないで、お願い」

「あずみ」

「やだ。もう、ひとりにしないで」

「あずみ。俺の知り合いの先生が往診に来てくれたんだ。ちゃんと診てもらおう。な？」

私は、もつろつとする頭で、必死に首を横に振る。

「こら、あずみ」

彼の声が、低くなる。

離さなきゃ、また、亮さんに怒られる。でも……。

「やだ。もう、離れたく、ない……」

彼の手を握りしめたまま、駄々っ子のように泣きだした私の唇が、突然ふさがれる。

「ふ……っ」

すぐに割り込んできたやわらかな感触に、ただでさえばおっとしている頭が、ゆっくりと溶けて行くのを感じていた……。

16 子供のように

何度も繰り返された優しいキスのあと、私をなだめて離れて行った亮さんと一緒に部屋に来たのは、由利が昼に連れて行くと言っていた絵理子先生だった。

「あら、今度はあなたの番なの？」

「先生。あずみのこと知ってるんだ」

「まあね。それにしても、ずいぶん親しげじゃない。あんたの彼女？」

「そんなことより、早く診てやってよ」

否定も肯定もせず、亮さんがキッチンへ姿を消す。

さっきまでとは一変、絵理子先生の顔が真剣なものになる。

診察を受けながら症状を正直に話すと、先生が大きな点滴を取り出した。

「軽い脱水症状起こしてるから、水分点滴するわね。その前に、消化を促す薬注射するから、手出して」

点滴スタンドを立てる先生にうなずくと、慣れた手つきで私の腕を消毒して、針を刺す。

管の接続部分から注射針を差し込んで液を押し出し、すぐに点滴の速度を調整した。

落ちてくる滴を見つめていたけど、すぐに眠気が差してくる。

「とにかく今は、何も考えずにゆっくり眠りなさい」

私のおでこを冷やしてくれる彼女の手が心地よくて、私はゆっくり眠りに落ちて行った。

おでこに冷えた何かを感じて、目を覚ます。

「あずみ。大丈夫？」

点滴はとくに終わっていた。ベッドサイドの灯りをつけただけの薄暗い空間で、由利が心配そうに私を覗き込んでいた。

彼女にうなずいて、辺りを見回す。でも、絵理子先生の姿も亮さんの姿も、見当たらない。

「亮さん……は？」

「え？ 沢村くん来てたの？」

由利が驚いたような表情で、私を見る。

「いない、の？」

「私が早退して帰って来たときは、絵理子先生しかいなかったわよ」

「……そんな」

不思議そうな私を見つめた由利が立ち上がり、リビングを出た。

私は彼女を目で追いながら視線を動かしたけど、だれも、いない。

あれはやっぱり、夢、だったの？

そんなはずないよ。だって、亮さんのぬくもりが、今でも身体の内側に残ってるのに。

彼がいない。その事実を突きつけられた私の目から涙がこぼれ落ちた。

悲しくて、何度もしゃくりあげる。

「あ、あずみ？ どうしたの？」

スポーツドリンクを持ってきた由利が、とんでもない声をあげて近づいて来た。

「泣いたらまた、熱上がるわよ。一体どうしたの？」

「亮さんが……いなくなっちゃった」

「いなくなつた。って言われても。ね、本当に来てたの？」

「来てたよ！ キッチンに倒れてた私を、ここまで運んでくれた」

離れたくなくて、子供のように泣きじゃくる私に、キスしてくれ
たのに。

……でも、私、聞いてない。

『そばにいるよ』って。

『二度と、離れない』って。

亮さんの口から、ひとことも　　。

「あ、あずみ？」

声を上げて泣き出した私によほど驚いたのか、ただでさえ高い由
利の声がさらにひっくり返った。

「もう、どうしたのよ？ 沢村くんと、何があったの？」
いつもの私なら、絶対に話さない。

でも、この事実をひとりで抱えるのは、今の私には重すぎる。
何度もしゃくりあげながら、由利にポツリ、ポツリと話す。

亮さんに『便宜上の恋人』を解消された理由。

合コンに行つて、由利たちの同僚の男に、危ない目に遭わされた
こと。

そして。

今日、亮さんが来てくれたときのことを。

「……バカ」

由利の手が、私の頬を軽く叩いた。

「何であの日、私に話してくれなかったのよ？ せめて、沢村くん
が離れて行った理由を教えてくださいれば、手を打ったのに」

由利が真剣な眼差しで、私を見下ろした。

「あんたをそんな目に遭わせた奴、うちの会社の誰？」

私は正直にあの男の名前を言った。すると、由利の顔がますます
険しくなる。

「……あの野郎。絶対許さないわ。裏から手回して、本社から追い

やってやる」

かなり物騒な言い方に、私の目から涙がピタツと止まり、冷えた背中がゾクツとする。

「い、いいよ。カクテルぶちまけてやったんだし」

「冗談じゃないわ。あいつ、既婚者のくせにあちこちの合コンで女の子持ち帰ってるって噂があつて……やっぱり本当だったんだ」

由利の目に、今までに見たことのない怒りの色が見えた。

「ゆ、由利？ 私はお持ち帰りされなかつたんだし。大丈夫だって、ね」

「何が大丈夫よ！？ そういう問題じゃないの！ ああ！ ムカつく！」

由利の叫び声とともに、キッチンで不自然な物音がした。

思わず目を向けた私を、由利が引き戻す。

「あいつのことは私にまかせといて。ぐうの音も出ないくらいにしてやるから。それよりあんた、沢村くんのこと好きなんでしょ？」

あいつの話題から、何でいきなりそちに行くの？

急に恥ずかしくなった私は、由利から目をそらす。

「ちよつと、彼がいなくてあれだけ泣いて、今さら首を横に振るわけじゃないわよね？」

かつてないほどの勢いに押された私は、素直にうなずいた。

もし、亮さんがもう一度来てくれたなら。

私から離れるなんて、二度としない。

「本当ね？」

「うん。私、亮さんが好き。そばにいて、欲しい」

由利の目を見て、すっかりうなずく。

すると……。

「ねえ、今の聞こえた？」

キッチンに向かって、由利が叫んだ。

「……は？」

何がなんだかわからずに茫然とする私の視線の先に、照れくさそうな顔をした亮さんが、ひょっこり現れた。

「良かったわね。この子が言ったこと、本音だったみたいよ」

嬉しそうに笑う彼の肩を数回叩いた由利が、私を振り返ってピースサインをした。

その笑顔に……私は今さら、騙されたことを知る。

身体中が一気に熱くなった私は、頭まで布団をかぶって、背を向ける。

「し、信じられない！！ 何、親友売る真似してんの！？」

「親友を売るなんて失礼ね。先に告白したのはあんたでしょうに。」

私は、確認作業をしてあげただけ」

しれつと言つてのける由利に、私は叫ぶ。

「う、うるさいな！ ふたりとも出てってよ！ 帰ってたら！！」

「はいはい。お望みどおり私は出ていきますよ。沢村くん、あとお願いね」

「でも由利さん。出てくつたって」

「いつものホテルに止まるから、心配ないわ。それじゃあね、あずみ。明日の朝7時過ぎにまた来るから」

心底楽しそうな声で笑った由利の足音が、遠ざかって行く。それと入れ替わりに、亮さんが近づいてくるのがわかった。重みがかかって、ベッドがきしむ。

「あずみ。顔見せてよ」

由利以上に嬉しそうな声に、私のいら立ちがさらに高まる。

ひどいよ。亮さん。

由利とふたりで私を試すようなこととして、何が楽しいわけ？ あやまってくれるまでは、絶対に、顔なんか見せてやらない。

「……怒ってる？」

何わかりきったこと訊いてんの？ 当たり前じゃないよ。

私の肩に、軽い重みがかかる。

ふれられたくなくて、身をよじってそれを振り払い、ますます壁際に寄っていく。

「あずみが顔見せてくれないなら、俺も帰ろうかな」

ため息混じりの声に、小さく肩が震える。目の奥が熱くなって、何度目かの涙がまた頬を伝う。

どうしてそんな意地悪するのよ？

私の気持ち知ってて、騙したのは亮さんなのに。

ベッドサイドの重みが取れて、亮さんが立ち上がったのがわかった。

「……亮さん！」

たまらず起き上がって、彼の背中に声をかけた。

振り返った亮さんが、見たことのない満面の笑みで近づき、私の前に座る。

「泣くなよ、あずみ」

余裕たつぷりの態度に悔しさがこみ上げて、目の前にある彼の胸を、思い切り叩いてやる。

「いてっ！ こら、痛いって。あずみ！」

力いっぱい動かす私の手を封じて、彼が私の身体を閉じ込める。

「……ごめん。あずみの言葉がうわごとみたいだったから。せつかく言ってくれても、自信持てなくて」

またしゃくりあげた私の頭を、亮さんが優しく撫でてくれる。

「一回、本当に帰ろうとしたんだ。そしたら由利さんが『絶対本音

聞き出してやるから、待ってて』って俺のキーケース没収しちゃって……。あ！」

いきなりの大声に驚いて、亮さんを見上げる。

「どう、したの？」

「由利さん。それ持ってたままだ。俺、帰れない……」

亮さんの目が、宙をさまよう。その呆けた顔があまりにもおかしくて、私は涙をこぼしながら、でも、思い切り笑ってやった。

17 幸せのかたち

「おい。何でそんなに楽しそうに笑うんだよ」

笑い続ける私を、亮さんが恨めしそうに見る。けど、その顔すらおかしくて仕方がない。

「こら、あずみ」

「由利とふたりで私を騙したバツよ。ざまあみろ」

嫌みを込めてそっぽを向いた私の頬を挟み、視線を戻した亮さんが、目を輝かせてにつこり笑った。

「な、何よ」

イヤな予感がした私は後ずさるうとするけど、さらににじり寄られて、すぐ近くに彼の顔が来る。

「あずみ、大事なこと忘れてないか？ 俺が帰れない、イコール、ここに泊まんなきゃならないってことなんだぞ。それがどういう意味か……わかるよな？」

亮さんの微笑みに、また悪魔が宿る。

「か、勝手に決めないでよ！ タクシー使って帰るなり、近くのホテルに泊まればいいでしょう！？」

「やだ。どっちみち今日は、あずみのそばにいるって決めたし」

「そんなことまで決めなくていい！」

してやつたり、って思ったのに。気がつけばまた、彼のペースに完全に巻き込まれてる。

「あずみ。今、してやつたりって思ってただろ？」

あつという間に見抜かれてしまい、思わず固まった私のあごを、亮さんが上向かせた。

「……甘いんだよ」

いつもより少し低い声が聞こえて、すぐ、柔らかな唇が割り込んで来た。

抵抗する間もないまま角度を変えて重ねられ、湿った感触が私の

舌尖を小刻みにかすめてく。

何度も浅く、深く絡められる彼の舌にくすぐられた私は、鼻から抜けた、甘えるような声しか出せなくて。

ただでさえ熱い身体からはあっけなく力が抜けて。彼がくれたぬくもりで溶けきってしまった私は、彼の首に腕を絡めたまま応えることもできずに、やまないキスを受け止めるだけになっていた。

異変に気づいたのか、唇を離れた亮さんが、私のおでこに手を当てる。

「……やべえ。熱、上がってるよな？ 大丈夫か？」

ぼおっとした頭で、力なくうなずく。

「どうしよう。絵理子先生や由利さんに怒られる。『あんた病人に何やってんの？』って」

珍しくおろおろしてる亮さんが愛おしくて、私は彼の頬にそっと唇を寄せた。

「大丈夫だよ。亮さんのせいじゃないから」

「だけど……」

「これくらいなら薬飲めば平気。キッチンに薬箱あるから、取って来てくれる？」

「いや、これ」

ベッド脇にある小さな台の上から、白い大きな袋を、亮さんが取り出した。

「絵理子先生が持ってきてくれた。これが確か解熱剤」

少し大きめの錠剤を、亮さんが持ってきた水で飲み下し、また横になる。

「キッチンにある布団、借りるから。今日はベッドの下で寝るよ」

汗ばんだおでこを優しく撫でてくれる手が心地よくて、私は頬を緩めてうなずく。

「こんなこと言ったら怒られるかもだけど、あずみが具合悪くてよかった」

「どうして？」

今度は亮さんが、にやけた顔をして私に耳打ちをした。
その内容に、勢いよく出た手が、彼の頬にヒットする。

「いてえ！ おい、いきなり殴ることないだろ！？」

「そ、そんなこといちいち言わなくてもいいじゃないよ。バカじゃないの！？」

「バカ、つて。あずみが訊いて来たんだろう？ お前覚えとけよ！」

「明日になって熱が下がったら、きれいさっぱり忘れてるわよ！」

「あ、そ。元気になったら思い出させてやるから、首洗って待ってる！」

「誰が！？ 待っててなんかやるもんですか！」

お互い、言いたいことを口にしてしばらく睨み合っていたけど、どちらからともなく吹き出した。

「何やってるんだかな。俺たち」

「……だね」

また、私の頬に手を添えた亮さんが近づいて来た。

今度はあらかじめ目を閉じて、彼の唇を受け止める。

「おやすみ。あずみ」

「おやすみなさい」

『本当の恋人』になつてからの「おやすみ」は少し照れくさくて、でも、すごく嬉しくて、手を握ってくれている亮さんの優しい視線を感じながら、私は、目を閉じた。

遠くで、チャイムの鳴る音が聞こえる。

夢と現実を行ったり来たりしている私の近くで、布が擦れる音がした。

「……何だ？ こんな朝早くに」

また、チャイムが鳴った。

どうにか目を開けて時計を見ると、6時半を少し過ぎたところだった。

「あずみ、おはよう」

「おはよう。誰よ？ もう」

「いいよ。俺が出る。はい！」

起き上がるうとした私を制止して、亮さんがキッチンへ出た。少し経って、違う男のひとの声が聞こえてくる。

……まさか、忠行さん？

イヤな予感がした私は、自分の身体をきつく抱きしめる。

「あずみ、起きられるか？」

少し慌てた様子で、亮さんがリビングへ顔を見せた。

「来たの、誰？」

「隼人さん」

「野田さん？」

うなずいた亮さんが、タンスの取っ手にかけていた自身のジャケットを私に羽織らせてくれた。

彼に手を引かれ、キッチンへ顔を出す。

「ども。朝早くに」

早朝だからか、白いＴシャツにＧパンをはいた野田さんが、気まぐすそに頭を下げて来た。

「いえ。あの……この前はすみませんでした」

私も、レインボーで松田くんのことを持ちだして彼を責めたことを、あやまる。

「いや。俺こそカツとなつて申し訳ない。由利は？」

「俺たちに気を遣ってくれて、いつものホテルに泊まる、って昨夜出て行きました。もうすぐ来ると思いますけど」

「亮。お前、この子との関係解消したんじゃないのか？」

亮さんが説明し終わると、野田さんは何やらにやけた表情で、私と彼を交互に見つめてくる。

「まあ、色々ありましてね」

私を見つめて頬を緩めた亮さんが、肩を叩いて椅子に座らせてくれた。

「じゃ、君らは昨夜、そういう関係になったわけだ。お邪魔しちゃったなあ」

さらに顔をにやけさせた野田さんが、身を乗り出してくる。

「何言ってるんすか。あずみの具合が悪くて、それどころじゃなかったんです」

「何？ どうしたの？」

「……ちよつと」

昨日盗み聞きされてるから、合コンで危ない目に遭ったことは知られてる。でも……。

「そついやさ、昨日由利さんがえらく怒ってたときあったけど、それと関係あるの？」

「話さなきゃ、ダメ？」

「いや、あずみが話したくないならいいけど」

「おいおい亮。甘やかすなよ。あまり好き勝手させてるとだな」

「肝心なときにウロウロしてる野田さんには言われたくありません」
亮さんに向けた彼の言葉をピシヤリとさえぎる。

「……きついなあ。亮、考え直すなら今のうちだぞ」

「どついう意味ですか!？」

両手をついて立ち上がったはいいものの、いきなり目の前が真っ暗になる。

「やめて下さいよ。やっと振り向かせたんだから、そんな気はまったくありません」

ふらついた私を支えるように抱き止めてくれた亮さんの声が、すぐ近くで聞こえる。

彼の気持ちがすぐくうれしくて、勝手に頬が緩む。

「はいはい、ごちそうさん。……いいよな。つきあい始め、って」
小さく笑った野田さんが、自嘲気味につぶやく。

「隼人さん」

「先のことも、イヤなことだって考えずに、互いのことだけ見てりやいい時期だ。正直、羨ましいよ」

「まだ、迷ってるんですか？ 由利さんとのこと」

私より先に、亮さんが問う。

「いや、決めたよ。でもな」

「でも？」

私が先を促すと、野田さんは、顔の前で手を組んで大きなため息をついた。

「考え出すと怖くなる。俺の決断は、由利を不幸にするんじゃないだろうか？ って」

「隼人さん」

「俺の決断はきつと、あいつの意に沿わないものだろうし。どんなに俺が幸せにする、って言ったって、それをどう感じるかは由利次第だしな」

野田さんが、さらに深いため息をついて天を仰ぐ。

私も亮さんも、何も言えずに彼を見つめるだけだったそのとき。

「ただいま」

玄関の扉が開き、由利の元気な声が聞こえて来た。

18 『信じる』こと

「隼人……」

嬉々として入って来た由利の表情が一瞬でこわばった。

「よお」

彼女をきちんと見て、野田さんは手を上げる。

私の隣に座る亮さんが、肩を叩いてきた。彼が何をしたいかわかった私は、一緒に立ち上がる。

「俺たち、席外しますよ。終わったら」

「いや。ここにいろ」

私の手を取った亮さんを遮って、野田さんが改めて由利を見た。亮さんも私も、何も言えずにふたりを見る。

「由利」

立ち尽くしたままうつむいた由利の肩が、小さく震える。

「お前には申し訳ないと思うけど、俺は、前にも話したように、本社に戻るつもりはない」

大きく息を吐き出して、野田さんが切り出した。

「結婚しても、この先給料が上がるっていう確証がない中で、お前に仕事を辞めていいとも言えないし、もしかしたら、子供も作れないかもしれない」

野田さんの口から淡々と語られる『決断』を聞く由利は、身動きひとつしない。

うつむいたまま拳を握りしめる由利の感情がわからず、息を詰めて見守る私の手を、亮さんが強く握りしめた。

横を見ると、野田さんを見つめる彼の顔もすぐこわばっている。「正直、お前を幸せに出来る自信は、今の俺にはない。……それでも」

言葉を切った野田さんが、Gパンのポケットから紙を取り出した。開いて机の上に置いたのは、由利が突きつけたと言っていた婚姻

届。

由利が自分の名前だけ書いた隣の枠には、野田さんの名前をはじめとした必要事項がすべて記載されていて、一番下の欄にもサインと捺印がされてある。

「由利がそれでもいいって言うなら、俺が書いた隣の欄、全部埋めてくれ」

由利を見つめる野田さんの視線は、真剣そのもの。現状に悩み抜いて、それでも彼女と一緒に歩む決意をした彼の姿に、私の胸が熱くなる。

亮さんもそれは同じようで、私を見下ろしてうなずく彼の目が、少し赤い。

ところが。

「……書けるわけ、ないじゃないの」

由利のつぶやきが、野田さんの表情をこわばらせた。

「由利！ あんた……」

一歩前に出ようとした私を抑えるように、亮さんが手を引く。

何言ってるの？ 由利。

この前、野田さん以外考えられないって言ったの、あんたじゃないよ。

本社に戻らない野田さんに、愛想尽かしたの？

だとしたら、あんたこれからどうするのよ？

身じろぎもしない野田さんと由利を交互に見比べた私は、また、亮さんの手を強く握る。

「由利……」

しばらくして、野田さんが立ち上がった。近寄ろうとする彼を制するように、顔を上げた由利の目からは、涙がこぼれ落ちている。

「こんな状態で書けつて言うの？ あなたの顔も満足に見えないのに、字なんか書けるわけじゃないでしょう！？ 何考えてるのよ、バカ！！」

「由利」

「あなたに本社に戻らないって聞いたときから、覚悟決めてたわよ！ お金がないなら私だって働ける。子供だって、育てられるときが来たら何歳になっても産むわよ。どうしてそんなことで悩むの？ 何でついて来いって言うてくれないのよ！？」

野田さんを見据えて叫ぶ由利の身体が、見えなくなった。

抱きしめる野田さんの背中に手を回した由利が、子供のように泣きじゃくる。

「ごめん、由利。本当に……ごめん」

野田さんの声も、震えている。

寄り添うふたりの姿が、涙でぼやけた。

去年の冬、苦しんでいた由利の姿が脳裏に浮かんでは消える。

…… 由利。よかったね。

心の中でつぶやく私の手を握っていた亮さんが、肩を叩いてきた。目をうるませた彼とうなずきあって、ふたりのもとへ歩み寄る。

「おめでとう、由利」

「隼人さん、よかったすね」

顔を見合わせた4人の目には、涙。

でも、それは決して恥ずかしいものじゃない。

由利と私が抱き合ってひとしきり泣いたあと、手をしっかりと繋いで帰って行く野田さんたちを、笑顔で見送った。

「よかったな。あのふたり」

由利に返してもらったキーケースを手のひらで転がして、亮さんがつぶやく。

「うん。一時はどうなるかと思ったけど。本当によかった」

ホッとして玄関を見つめる私を、亮さんが後ろから抱きしめて来た。

「亮、さん？」

突然のことに戸惑う私に、彼がそつと囁きかけてくる。

「俺たちも、隼人さんたちみたいになれたらいいな」

「え？」

驚き、振り返った私を、亮さんが不思議そうに見つめて来る。

「どうした？」

「いや、だって……」

由利と野田さんみたいになれたらってことは……つまり。

「まだ、つきあい始めたばかりだよ。私たち」

その先を想像してうつむく私を、亮さんが抱きしめて来る。

「うん。でも俺最初に言ったよ。『きつとうまくやってける』って」

「そんなの、わからないじゃないよ」

「最初からそんなこと言ってくれるなよ。俺はうまくやる気満々なんですけど」

「でも……忠行さんだって言っただじゃない。私はきつい女だから、プライド傷つけられないように気をつけろ、って」

一気にまくしたけると、亮さんが大きなため息をついた。

「あのな。俺を他の男と一緒にしないでくれる？　っていうか、あいつと俺、どっち信じるの？」

私を離し、低い声で訊ねて来る。

見下ろしてくる目は少し怒っているようで、私は、言ってはいけないことを口にしてしまったと気づく。

「あ、あの……」

言葉が続かず、また下を向いて口の前で泳ぐ私の手を、亮さんが取った。

「今までは今まで。これから先は、俺を信じて？　もう、俺から君

をふることは絶対ないから」

「……どうして、言い切れるの？」

どこまでも自信たっぷりに言う彼の気持ちがわからない私のあごを、彼が持ち上げた。

「昨日、俺にすがりついて、うなずいてくれたあずみを抱きしめたときに思ったんだ。気が強いところしか見えないような奴には返さない。他の男にも絶対渡さない。俺があずみを守るんだ、って」

私の目を見て言い切ってくれた亮さんの気持ちに胸が熱くなって、彼の顔が、涙でぼやける。

「おおい、何で泣くの？」

あふれ出る涙を止められない私の頭を、亮さんがあわてた様子で引き寄せた。

そんなこと、言ってくれるひとなんか誰もいなかった。

『一緒にいたら楽しい』『頼りがいがある』

みんな、そういう風にしか思ってくれなかったのに。

そんなことを考えてくれた彼の気持ち嬉しくて、涙がいつまでも止まらなかった。

「落ち着いたか？」

肩の震えが小さくなったのを見計らってか、亮さんが声をかけて来る。

声を出せないまま、私は何度もうなずいた。

「こんな風に泣かれちまったら離れたくないけど……そろそろ帰らないと」

「ありがとう。……でも、仕事、なんでしょ？」

鼻をすすりながら訊くと、亮さんが何ともいえない表情でうなずく。

「うん。今日は休む先輩のクラスも代わりに受け持つから、昼も抜け出せないし……独りで大丈夫か？」

「大丈夫。ちゃんと薬飲んで大人しく寝てるから」

「何かあったら、絵理子先生のとこ電話しろよ。俺から話しくから」

頭を優しく叩いてくれた亮さんにうなずいて、ジャケットを返す。

「あ、そうだ」

「何？」

「俺のこと、信じてくれる？」

少しおどけた口調で、子供がお母さんにおねだりするような表情で見下ろす亮さんに小さく笑って、はつきりうなずく。

「うん。亮さんを……信じる」

「ありがとう」

につこり笑った彼の顔が近づいてくる。

目を閉じた私に浅く、何度もついばむように唇を重ねて、亮さんがそっと離れた。

「じゃ、仕事終わったらまた来る」

「ん。待つてる」

私の頭を何度か叩き、ジャケットを羽織った彼の背中を見送った。扉が閉まると同時に、そっと唇に指を這わせて、亮さんのぬくもりを確かめる。

いつにない温かい気持ち心がこみ上げて、いつしか頬が緩む。

最初は、恋人のふりをしてくれるだけでいいと思っていたのに。どんどん迫ってくる彼に戸惑いを隠せないまま抱きしめられて、キスまでされて。

それですっかり心まで奪われて、気がついたら、彼のそばから離れられなくなってた。

今度こそは……ふられずに、すむんだ。

ずっと、一緒にいられるよね？ 亮さんと。

大きな期待と小さな不安が心を行きかう中、彼が抱きしめてくれた感覚を確かめるように、そっと目を閉じた。

18 『信じる』こと（後書き）

いつもご覧いただきありがとうございます。作者の笠原です。
いただいたweb拍手コメントへの御礼は、明日の夕方以降、活動
報告の中でさせていただきます。

返事が遅くなり、大変申し訳ございません。

温かいコメントを、いつもありがとうございます！

19 いきなり、同棲！？

遠くで聞こえる犬の鳴き声で、私は目を覚ます。

辺りを見回すとすでに暗い。月明かりのおかげで、かろうじて部屋の中がみえるくらいだ。

「今、何時？」

寝ぼけた頭を起こして、すぐ近くにあるライトをつける。時計を見ると、午後9時を回っていた。

……すいぶん、寝ちゃったな。

確か、熱が出ないのを確認してお風呂に入ったのが、午後2時。ぬるめのお湯にゆっくりつかって出て来て、髪の毛が完全に乾いたのが4時くらい。

寝てばかりだったせいで体力がないからすごく疲れて、ベッドに入って……。その後の記憶は、ない。

鍵をかけたままだったから、亮さんが来てくれたのに気づかなかったかもしれない。そう思った私は時計のすぐ横にある携帯電話を開くけど、着信もメールも、ない。

あれ？ 確か今日は朝からだったよね。

先輩の分もクラスを持たなきゃならない、とは言ってたけど、遅くなるとは聞いてなかった。

どうしたのか訊いてみようと思って彼の番号を表示させたけど、仕事中だったら困るから待受画面に戻して、電話を閉じる。

同時に、チャイムの音が鳴った。

キッチンの電気をつけて、玄関先まで出る。

「あずみ、俺。悪いけど開けてくれる？」

亮さんの声が聞こえた。自然と緩んだ頬を何度か叩いて、ドアを開けた。

「いらつしゃい」

「ごめん。遅くなって。……っ」と

さらに大きく開けたドアの隙間から、亮さんが大きなキャリーバックを入れる。見ると、彼の肩にもスポーツバックがかかっている。

「亮さん。何？ この荷物」

「ああ。当座の荷物。今日から俺、ここに泊まるから」

「……………は？」

いとも簡単に、あっさりと言ってくれた彼の顔を呆然と見上げる。

「何、その顔」

亮さんの声に、戸惑いの色が交じる。

「い、いや。だって……」

「由利さんも帰っちゃったし、具合が悪いあずみを独りにはしておけないから」

「だ、大丈夫だよ？ 今週いっぱいは念のため休み取ったけど、もう、熱もないし」

「どれ」

荷物を置いた亮さんが、おでこをぴったりつけてきた。

それだけで、頬が熱くなる。

「ダメ。微熱あり」

「いや、それは亮さんが」

いきなり至近距離に来たから そう言おうとした私の身体が、浮く。

「ち、ちよっと！」

「病人は安静にしてる」

「安静に、って言ったって、私が起きたのはあなたを出迎えるためじゃないよ」

反論もむなしく、あっという間にベッドに運ばれた。

「ちよっと、亮さんったら！」

キッチンへ出ようとした亮さんを呼びとめると、こっちに近づいて来た彼の表情が、寂しげなものに変わる。

「……迷惑、かな？」

正式につきあつて、まだ2日。なのに……。

これじゃ、いきなり『同棲状態突入』じゃないよ！

「心配なんだ。具合が悪いだけなら毎日見舞いに来るだけでもいいんだけど、もし、俺が帰った後に大村が来たら、って考えると。さ」何も言えない私から目をそらして、亮さんがつぶやく。

「この前、自分から『恋人役降りる』って言つたくせに、すごく気になって仕方がなかった。あいつに何かされてないかって。つきあい始めた今はなおさら心配で。俺が守るって決めたのに守ってやれなかったらって思ったら、いてもたってもいらなくて」

「そんな……もしそうだったとしても、それは亮さんのせいじゃないよ」

「お願い。変なこと絶対しないからさ、俺のワガママ聞いてくれなかな？」

亮さんが、包み込むような目で私を見る。

初めてご飯と一緒に食べたとき。

恋人のふりをしてくれるひとを亮さん以外で探そうとした私に向けられたのと、同じまなざし……。

あのときもそうだったけど、そんな目で見られたら断れない。

私は、小さくうなずいた。

「ありがとう」

腿の上に置いた手をそつと握って、亮さんが頬にキスをしてくる。

「……もう」

照れくさくてうつむいた私を、彼がそつと包んだ。

「本当、かわいいな。あずみは」
「あのね亮さん。私は」

かわいくなんか、ない。

彼の言葉を否定しようとした私をさえぎるように、腕に力を込めてきた。

「あずみがどう思おうと、俺がかわいいって思ってたからいいの。素直にうんて言っときなさい」

「……そんなにいいわけ？」

呆れたように訊ねると、私を離れた亮さんが、満面の笑みでうなずく。

「そう。いいの。あずみのかわいい所は俺だけが知ってれば十分」

最後、真顔で言われてしまった私は、熱くなった顔を見られたくなくて、彼の胸に寄りかかる。

「何照れてんの」

「そんな風に言われたことないから、恥ずかしいんだってば」

「これからたくさん言うから、慣れてちょうだい」

「無理！」

「どうして？」

少しふくれっ面をして、亮さんが私を見下ろす。

「だ、だって。かわいくないのは私が一番よく」

わかってる。

今度は、そう言おうとした唇が塞がれる。

これ以上、何も言わせないと告げるかのように、いきなり深く、舌を絡めて来る。

「ふ……うん」

鼻から漏れた声は高くて、甘い。

あつという間に、身体力が抜ける。

あごを持つ手と違う腕で支えられることで、かるうじて座つてられる状態。

長く、少し激しいキスのあとで、頬に唇を寄せた亮さんが優しくほほえむ。

「かわいいよ。あずみは」

「……どこがよ」

かすかに残つてゐる理性をかき集めてどうにかつぶやく。

「わからない？　だったら、教えてやるよ」

耳元で囁かれて、ただでさえほてっている顔がさらに熱くなる。外した視線はすぐに戻されて、また、唇が重なってきた。

何度も繰り返される、ついはむようなキス。唇が離れることに、亮さんのかすれた声が響く。

今、俺とのキスに素直に反応しているあずみも。

何か言われるたびに照れて、すぐに真っ赤になるあずみも。

一生懸命、強い自分でいようとするあずみも、全部かわいい。

亮さんから注ぎ込まれる熱で、頭がぼおつとなつた私は、自分から舌を絡めて彼の口づけに応え、背中を強く抱きしめた。

その直後、これ以上ないほど密着した身体を、亮さんがそつと離す。

「ヤバい、俺」

「……………え？」

言葉の意味がわからなくて、ぼんやり見つめる私から目をそらし、亮さんが布団を持って立ち上がった。

私、何か気にさわることしちゃった？

「亮さん！」

さすがのように声をかけた私を振り返った亮さんの顔は真っ赤。いつもと違う目つきが、私を捉える。

「これ以上『教えて』ると、マジで止まらなくなりそう。だから、今日はキッチンで寝る」

ようやく彼の意図を知った私も、どう答えたらいいかわからずにうなずいた。

「おやすみ」

「おやすみ……なさい」

キッチンへの扉が閉まると同時に、今まで感じたことのない寂しさ、胸を覆う。

止まらなくてもよかった……のに。

さっきのぬくもりを確かめる私の身体が、さらに熱くなった。

一番奥から湧き上がる何か喉元を駆け上がり、『疼き』が全身を支配する。

そのせいなのか。

結局、私が眠れたのは、明け方近くになってからだった。

19 いきなり、同棲！？（後書き）

こんばんは。作者の笠原です。

体調不良が長引いてしまったせいか、またもや大変お待たせしてしまい、申し訳ありませんでした。

寒暖の差が激しい昨今、どうぞお身体ご自愛下さいませ。（自戒の意味も込めて）

20 今までにない『自分』

「……え？ もうこんな時間」

差し込む朝日の明るさで目を覚ました私の前にある時計が、午前11時を指している。

勢いよく起きてキッチンへ出ると、案の定、亮さんの姿はなかった。

テーブルの上に、メモ紙が乗っている。

『よく眠っているようだから、起こさずに行きます。ちゃんとご飯食べて薬飲むんだぞ　亮』

テーブルの向こう側には、丁寧にたたまれた布団。その脇に彼が持ってきたキャリーバッグが置いてある。

それを見た私は大きくため息をついて、冷蔵庫の扉を開けた。

葉物の野菜を取り出して細かく刻む。冷凍したご飯をレンジで温めて、それらと一緒にだし汁へ入れた。くつくつと煮える音が耳に優しく届く。

そういえば亮さん、朝ご飯食べて行ったのかな？

ガス台を使った形跡はおろか、何かを買って食べたゴミすらない。そもそも彼、自分で料理してるんだろうか？

気軽に、大きな荷物をしょってここに来るくらいだから、実家住まいではないだろうし……。

私はまた、冷蔵庫を開けた。残ってるのはいくつかの野菜と漬け物と卵、ウインナーくらいだ。

冷凍庫にはご飯も余ってるし、チャーハンくらいなら作れるか。明日の昼過ぎにでも、買い物に出よう。

できたおじやをお椀に開けて、スポーツドリンクを取り出した。いただきますとつぶやいて、れんげを持った手を合わせる。

絵理子先生にきちんと診察してもらったおかげか、昨日よりはラクに食べられる。

それでも一昨日、あんな状態で倒れてしまったから慎重に、ゆっくりと食べていたら30分以上はかかってしまった。

少し食休みをしてから薬を飲み、歯を磨こうと洗面所へ向かう。鏡に映る顔を見た私の耳に、昨夜の亮さんの声がよみがえる。

『かわいいよ、あずみは』

思い出すだけで、鏡の中の私の頬が真っ赤に染まるのがわかった。

私……『かわいい』のかな？ 本当に。

ふと我に返った私は、熱くなった顔を冷たい水で何度も洗った。

『あずみは強いから』と言われるのが当たり前だったのに、彼が私に囁く言葉は、聞き慣れてないものばかりで戸惑ってしまう。

でも……嫌じゃ、ない。

亮さんが言ってくれる『かわいい』なら、何度でも聞きたいと思ってしまう。

何、考えてんの？ 私。

化粧水を手に乗せて乱暴に頬を叩き、自分の顔が見えないようにうつむいて歯磨きを済ませ、リビングに戻る。

ベッドを目にしただけで、昨夜、亮さんとのキスを思い出した。

奥からゆっくり湧き上がってくる熱が喉元にたまり、また、身体が疼きだす。

……やだ。どうしちゃったんだろう？

今まで、こんな風になったことは一度もない。
求められるままそういう関係になって、抱かれてる間はどんなに
身体を熱くしても、一夜明ければ冷めていることの方が多かった。
今思えば、独りでいるときに思い出すこともなかったような気がする。

でも……今は、違う。

『かわいい』って、言って欲しい。
抱きしめて、キスしてもらいたい。
亮さんの、ぬくもりに包まれて……眠りたい。

私はキッチンに戻り、キャリーケースの傍らにある布団を広げた。
横になって敷き布団に顔を押し付けると、亮さんの匂いがする。
持てあましている熱を冷ますには物足りないけど、今はただ、彼
を感じていたい。

ほんの少しの間でいいから、こうして……。

「これでよしと」

テーブルに皿を乗せて顔を上げると、時計の針は、午後7時過ぎ
を指していた。

冷蔵庫にあるものをかき集めて、亮さんにはチャーハンと大根サ
ラダ。私用に消化に優しいリゾットを作ったらあつという間にこん
な時間。

これだけ作っても気持ち悪くならなかったから、明日くらいからはご飯を食べてみようかな。

そんなことをぼんやり考えていると、鍵が開く音が聞こえた。玄関まで迎えに出ると、スニーカーを脱いでいた亮さんが、顔を上げて笑った。

「ただいま」

「おかえりなさい」

そんなやり取りも何だか新鮮で、自然と頬が緩んでしまう。

「ご飯は？」

「まだ。家賃振り込んだら持ち合わせなくなっちゃって、これから買いに行こうと思ってるんだけど。……あれ？」

鼻を小さく動かした亮さんが、キッチンに入る。

テーブルに並んだ料理を見て、私の方を振り返った。

「作って、くれたの？」

驚いたような表情の亮さんに、うなずく。

すると、彼が私の手を強く握りしめた。

「……すげえ嬉しい。ありがとう！ でも、大丈夫か？」

「うん。大丈夫だよ。作ってる間も気持ち悪くならなかったし」

「よかった。無理したんじゃないかってちょっと心配した」

「本当に具合悪かったら、亮さん放置して寝てるって。だから、心配しないで」

「了解。ちょっと待ってて。手、洗ってくるから」

笑顔で洗面台に向かった彼を見送り、水を用意して椅子に座る。

「いただきます」

戻って来た亮さんが、早速チャーハンを口にします。

「どう？」

料理は得意だと自負しているけど、彼氏と名のつくひとに食べてもらうのは久しぶりで、少し緊張する。

「おいしい。これならいくらでも食べられそう。おかわりないの？」

「残念ながらそれで全部。冷蔵庫の中身全部使っちゃったから、明

日買い物に行かないと」

「午前中ならつきあえるよ。明日昼からだから」

「本当？ 助かる。ここんとこ寝たきりだったから体力に自信なくって」

指でOKサインを作った亮さんは、よほどお腹が空いていたのかひたすら食べ続ける。

のんびり食べている私をあつという間に置き去りにして、サラダとともに完食した。

「ごちそうさま。あずみ、食べられるか？」

まだ3分の1残っているお椀の中身を覗き込み、亮さんが心配そうなまなざしを私に向ける。

「大丈夫。昼よりペース早いから」

それでも5分以上かけて食べ終えた私のお椀を、自身が使った皿とともにさつと片づけてくれる。

「あ、いいよ。私がやるから」

「何言ってるの。部屋のスペース借りてご飯まで作ってもらったんだから、これくらい、俺がやるのは当たり前」

「でも……」

「そんなことより、薬飲んで。まだ本調子じゃないんだから。な？」

私の手から取り上げたコップに水を汲み、冷蔵庫の上に置いてあった薬の袋を差し出してきた。

とりあえず、残った最後の胃薬を水とともに飲み下す。

コップを再度取り上げた亮さんが突然、私の手を引いた。

そのままリビングの入口まで連れて行かれ、胸が大きく高鳴った。

ところが。

彼に背中を軽く押しだされた私は、思わず振り向いて声をかける。

「亮さん」

「ん？ 何？」

ドアを閉めようとした亮さんが、真剣な表情で覗き込む。

「あ、その……えっと」

何と切り出しているかわからず口ごもる私の頬が、熱くなる。

「ほら、顔赤いぞ。明日買物に出るんだったら、今日は早く寝る」

「……………うん」

湧き上がる寂しさを隠さずにうなずく私のおでこに、彼の唇が触れた。

「じゃ、おやすみ」

「おやすみ……なさい」

穏やかな顔でうなずいて、亮さんがキッチンへ続く扉を閉める。

私は小さく息を吐いて、ベッドに潜り込む。

本調子じゃない私を気づかってくれてるんだろうけど…………正直、寂しい。

抱きしめて、とか、そういう関係に、とまではいなくても、せめて、一緒に部屋で眠りたい。

そう思うのは、ワガママ、なんだろうか？

彼の優しさに感謝しつつも、やり切れない気持ちのため息とともに吐き出して、私は目を閉じた。

20 今までにない『自分』（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。作者の笠原です。

頂いたweb拍手のコメントへの返事は、明日の夕方以降にさせていただきますので、ご了承くださいませ。

あたたかい言葉を、いつもありがとうございます！

21 あの日『言葉』（前書き）

大変長らくお待たせして申し訳ありませんでした！ 更新再開です。他の作品との兼ね合いもございますので、マイペースな更新になるかと思いますが、温かく見守っていただけたら幸いです。よろしくお願いします。

21 あの日『言葉』

「あ、これも食べたい」

上下黒のジャージを着た亮さんが、何のためらいもなく買い物かごに冷凍食品のからあげを入れた。

「ちよつと。こんなにいっぱい買ってどうするわけ？」

カートに積んだかごの中はすでにいっぱい。私ひとりなら、ゆうに2週間以上はもつ分の食べ物が入ってる。

「何で？ ふたりで食べるんだから問題ないでしょう」

それでも……約1週間ぶんはある。

かごを見ながら呆然としている私から、ふいに亮さんが離れた。中身を改めて覗くと、そこには、私が普段食べないものばかり。身体を動かす仕事をしている彼だもの。味付けの濃いものを好むのはわかるんだけど、レトルト食品が多い。しかも、私が作れるものばかり。

とりあえず、近くの棚にあるものからそつと戻す。

するとすぐに、真新しいプラスチックのコップと歯ブラシが後ろから降ってきた。

「ちよつ！ これ何よ？」

「俺用の歯磨きセット」

「歯磨きセット、って……。ねえ、いつまでうちにいる気？」

少し強い口調で訊ねた私に、亮さんは寂しそうな視線を向けて来た。

「……迷惑？」

「め、迷惑って……」

「俺、あずみとずっと一緒にいたいんだけど」

ずつと、をえらく強調した亮さんが、母親にすぎるような目で私を見る。

あまりにもストレートすぎて、恥ずかしくなった私は彼から逃げ

るようにカートを動かす。

「おい、逃げるな」

後ろから亮さんが追いかけてくる。でも、それにかまわず歩く私の前の角から、誰かが飛び出して来た。

「あ！ すみません」

顔を上げた私は、目の前の女性を見て驚く。

私と同じ……いや、某大型店のＴシャツの上にパーカーを羽織り、ジャージを穿いただけの私よりもうんという素材の服を着た真衣さんが、顔をこわばらせて立っていた。

「あずみ、どうした？」

急に立ち止まった私を覗き込み、視線をずらした亮さんが軽く会釈をする。

「あ……この前は、どうも」

亮さん、真衣さんと知り合い、なんだ……。

いたたまれなくなつて目をそらした私にかまわず、真衣さんが彼に話しかける声が聞こえる。

「いえ。こちらこそ。この前は……忠行さんが失礼なことを」

……あ、そうか。この前、亮さんも彼と鉢合わせたって言ったっけ。

あのとき、真衣さんもいたんだもの。顔を合わせてたっておかしくない。

私や真衣さんはもちろん、事情をわかってる亮さんも何も話さな

い。

気まずい沈黙が、私たちの間を流れる。

でも。それを破ったのは真衣さんの方だった。

「……よかった」

「え？」

思わず顔を上げた私の目に、少し小さな瞳に涙を浮かべて微笑む真衣さんの姿が映る。

「あのとき、忠行さんに言ってくれたこと……。嘘じゃないんだ、つて。あなたが愛してるのはこのひとなんだって自分の目で確かめることが出来て、安心しました」

本当に嬉しそうに、何度もお辞儀をして真衣さんが立ち去る。

すると。

「ね。俺、何が何だかわかんないんだけど……」

今度は、口もとに笑みをたたえた亮さんが、私をじつと見下ろして来る。

「あ。いや……そ、そ、その」

真衣さんのバカ！　こんなところで言うことないじゃないよ！

まさか、こんなところで、あのとき言わなかった言葉を暴露されるとは思ってもみなかった私は、思いつきりうろたえる。

「帰ろう。詳しいこと、たっつぷり聞かせてもらってから。な？」

語尾に「音符マーク」が山ほどつきそうな声を出した亮さんが、カートを押し始める。

これって、絶対、ヤバイよ。……ね？

期間は短いながらも、これまでの経験から、家に帰ったらどんなことになるか想像がついた私は、少しでも歩みを遅くして、彼と距離を置こうとする。

けど、当然許されるはずがなかった。肩を引き寄せられて、カーと彼の間にはさまれる。

「ちよっと！」

「逃げようだったってそうはいきません。あの時のこと、教えてもらうからね」

周りの奥さまたちの視線が、一気に私たちに集中する。

吹き出すのをこらえるひと、あからさまに顔をひそめるひと、様々な思惑を持った『目』が、私たちを捉えている。

「亮さん。私、逃げないからとりあえずここから出してよ」

「ダメ。ほら、行くよ」

まるで初めて会った日と同じように、結局は許してもらえず、そのまま帰途についたのだった……。

案の定、家に着いた私は荷物を片づける間もなく壁に押しつけられた。

悪魔の微笑みをたたえた亮さんの顔が、ぐっと近づく。

「ね。あのとき、大村くんは何て言ってくれたの？ あずみ」

どうにか逃れようと必死に両手を動かすけど、胸の前でひとつにまとめられてしまい、身動きが取れない。

「さ、さつき、真衣さんが言っただでしょう！？」

「うん。言っただよ」

あっさり肯定。でも。

「俺は、あずみの口から聞きたいの」

耳元でささやいてくる亮さんの低い声に、肩が小さく震える。

「ど、どうしてよ？」

「どうして、って……」

呆れたように、彼が大きなため息をついた。

「あのな……俺、まだ1回も聞いてないんだよ」

「な、何をよ！？」

「あずみの気持ち。君の口から直接聞いたこと、ない」

「う、嘘！ 倒れてたときに言っただじゃないよ！ そばに、いて。」

「……」

「ああ……うん。それは言われた」

亮さんが、口ごもった私から視線をそらし、何度かうなずく。

ところが。

「でも、何で『そばにいて欲しい』のかは聞いてないよ？ しかもあのとき、意識はつきりしてなかっただろ。俺、自信なくて帰りかけたって言っただよな」

また、ぐっと顔を近づけて、亮さんが私を見る。

何でそこまでつつこむのよ！？

「あ、何？ その不満そうな顔。じゃ、実力行使」

「え？ ちよっ……！」

私の手を離れた亮さんにあごを持ち上げられて、唇をふさがれた。すぐに深く、強く舌を絡められて、あっという間に身体から力が抜ける。

いつも以上に激しいキスに翻弄されてる私に、また、新たな刺激が加わった。

「ふ……っ！ うんっ」

あごの下でかすかにうごめく、亮さんの指。

背筋を何かが駆け抜けて、また、身体の奥に熱がたまっていく。

「や……あっ」

うなじを何度かすべった指が、鎖骨をなぞる。

その動きはあまりにも緩慢で、甘いしびれが身体中を駆けめぐる。

「りよう……さん、やだ……ったらあ……っ」

「やだ、じゃないの」

唇を離れた亮さんの唇が耳朶じだを噛み、あごを持ち上げていた手が、ゆっくりとTシャツの中に入り、腰をなでてきた。

大きく身体が震えてしまい、私はとっさに、亮さんの手を握りしめた。

「いう！ いう……から。これ以上、は……」

荒い息とともに吐き出した言葉に、亮さんが満足そうに微笑んだ。

「あの日、何て言ったの？ 大村くん」

亮さんが、すぐ近くで私を見下ろす。

恥ずかしくて仕方がない私は、きつく目を閉じて、ゆっくりと口を開く。

「今の、彼のこと」

「うん」

言葉を切った私にうなずく亮さんの声がまた、耳を揺らす。

「愛してる……っ、言った」

言い終わってすぐに、私の身体が、亮さんの腕に包まれた。

「ありがとう、あずみ。……すっげえ嬉しい」

頭を何度も優しく叩いてくれる亮さんの声が、はずんでる。

「よしと。これで、今日の仕事も頑張れるなあ。……本当に、ありがとう」

おでこにそつとキスをくれた亮さんが離れた。

力が入らなくてくず折れそうになる身体を壁にもたれかけて、どうにかこらえる。

「それじゃあずみ、行って来ます」

スポーツバッグを肩に下げた亮さんが、本当に嬉しそうに笑いかけ来る。

「行ってらっしゃい。気をつけて、ね」

私の様子に気づかない亮さんは、軽く手をあげて玄関へと消える。

そして。

ドアと鍵の閉まる音がした途端、私は、その場にへたり込んでしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5768j/>

S y m p a t h y ~ 素直になって ~

2010年11月29日00時40分発行